

生活支援コーディネーターによる
住民主体の「食」関連生活支援サービスの開発支援方策と
持続可能な事業実施・展開に関する調査研究事業



はじめに

食には人を和ませ、心を開く力があります。食は「生きる糧」であるとともに、人と人をつなげる接着剤にもなります。世代、地域、環境が違っていても食は誰にでも共通する行為であり、交流が希薄になった地域につながりをつくる〈地域コミュニティづくり〉には最適のツールです。

1980年代、各地に広がった高齢者対象の配食サービスや会食会は、助け合いの気持ちではじまりました。その後、居場所やサロンでの食の提供、料理教室等の食育活動、子ども食堂・地域食堂等、社会や課題の変化によって様々な形態で取り組まれるようになりました。

食事は生きる上で毎日必要ですが、「食」は栄養摂取にとどまらない、生活・文化に関わる多面的な営みでもあります。食がもたらす楽しさ、安心感、帰属感は、交流や出番づくり、見守り、文化の伝承といった価値を生み出しています。

食支援活動は、配食サービスや会食会、地域食堂といった活動形態で整理されることが多いですが、「食」に関連するアクションから考えてみると、食材調達・食材選択・料理といった、アクセス、栄養の知識、調理や家事のスキルに関わることや、美味しく食べる・楽しく食べるといったコミュニケーションに関すること、ケアや生活習慣としての食等、実に多様です。

「食」を、人の生きがいや心身の充実に関わる多面性のある営みと捉えたとき、私たちが地域で展開しようとする「食」に関する取り組みには、新たな大きな可能性を感じることもできるのではないのでしょうか。

このガイドブックでは、生活支援コーディネーターやコミュニティソーシャルワーカー、自治体職員、社協・NPO担当者の方々が、食に関連した活動を立ち上げたり連携したりするときのヒントとなる各地の様々な実践事例を、運営方法や活用しているアセットとともに紹介しています。豊かで多様な価値と、多くの関わりの場面がある食支援活動の設計に役立てていただければ幸いです。

食の活動に取り組む意義って何だろう？

人が集まるところには何かしらの食があります。食には人を和ませ心を開く力があります。

子ども食堂主催者

「食」は生きる糧であるとともに〈人と人をつなげる〉とても重要な役割があります。

県社協職員

食の温かさで、つながりが希薄になった地域をつなぐことができます。

第1層SC

一緒に食べることで〈つながり〉、食事を届けることで〈自宅のドアを開けられる〉また、〈困窮支援のツール〉にもなります。

大学研究者

世代、地域、環境は違っても、「食」は共通の行為です。

県社協職員

食に関する活動はあらゆる世代、能力に応じた出番があるのも良い点です。

NPO代表者

目次

はじめに	P01
目次	P02
アセット重視の考え方	P04
基本情報一覧	P06
[事例紹介]	P09
事例紹介① 百歳体操グループメンバーが担い手の「子ども食堂」	P10
こども食堂コスモス	P13
発想を広げるアセット活用アイデア1 寄付食材の運搬や保管はどうする?	P14
事例紹介② 江戸時代の登録文化財“足軽の家”で「シニア男性が運営する子ども食堂」	P14
足軽子ども食堂	P16
事例紹介③ 「調理ボランティアの派遣」活動を創出して、地域サロン応援	P16
サロンで調理ボランティア	P19
発想を広げるアセット活用アイデア2 お手本となる活動を、広域で展開していくには?	P19
事例紹介④ 団地の空き店舗で「食品販売と日替わり定食提供」	P20
UR公田町団地「いこい」	P23
発想を広げるアセット活用アイデア3 助成金等の受給終了後も活動を継続するには?	P24
事例紹介⑤ 食を介してゆるやかなつながりを築く場所	P24
ここめし/ここめし女子会	P26
事例紹介⑥ 地域のシニアボランティアが「朝食サービス」で子どもの育ちを応援	P26
下小モーニング	P28
発想を広げるアセット活用アイデア4 学校と連携するには?	P29
発想を広げるアセット活用アイデア5 多世代がつながるための工夫は?	P30
事例紹介⑦ 赤ちゃんから高齢者まで、「世代間交流があるダイニングサロン」	P30
介護予防サロン福蝶とキッズカフェ	P32
事例紹介⑧ 買い物困難地域の生活を支える「移動販売車」と地域交流	P32
上郷東連合町会 移動販売車	P35
発想を広げるアセット活用アイデア6 企業と連携するときの工夫は?	P36
事例紹介⑨ コロナがきっかけで生まれた「動く会食会・青空カフェ」	P36
キッチンカーdeあおぞらカフェ	P39
発想を広げるアセット活用アイデア7 コロナ禍をきっかけにした、新しいチャレンジは?	P40
事例紹介⑩ 「農家の女性たちがつくるふるさとの料理」で地域活性	P40
十和おかみさん市	P43
発想を広げるアセット活用アイデア8 福祉関連に見えないアセットを、どう発見・活用する?	P44
事例紹介⑪ 「日替わりカフェオーナー」の仕組みがつくる新たな地域のつながり	P44
わっくCafé	P47
発想を広げるアセット活用アイデア9 今までにない新しい層を巻き込むには?	P48
発想を広げるアセット活用アイデア10 活動を立ち上げたいが「この地域にはアセットがない」と思ったとき、どうする?	P48
[資料編] 事例から、わがまちの食支援活動を考えよう!	P49
委員会名簿	P52

食
×
出番・役割

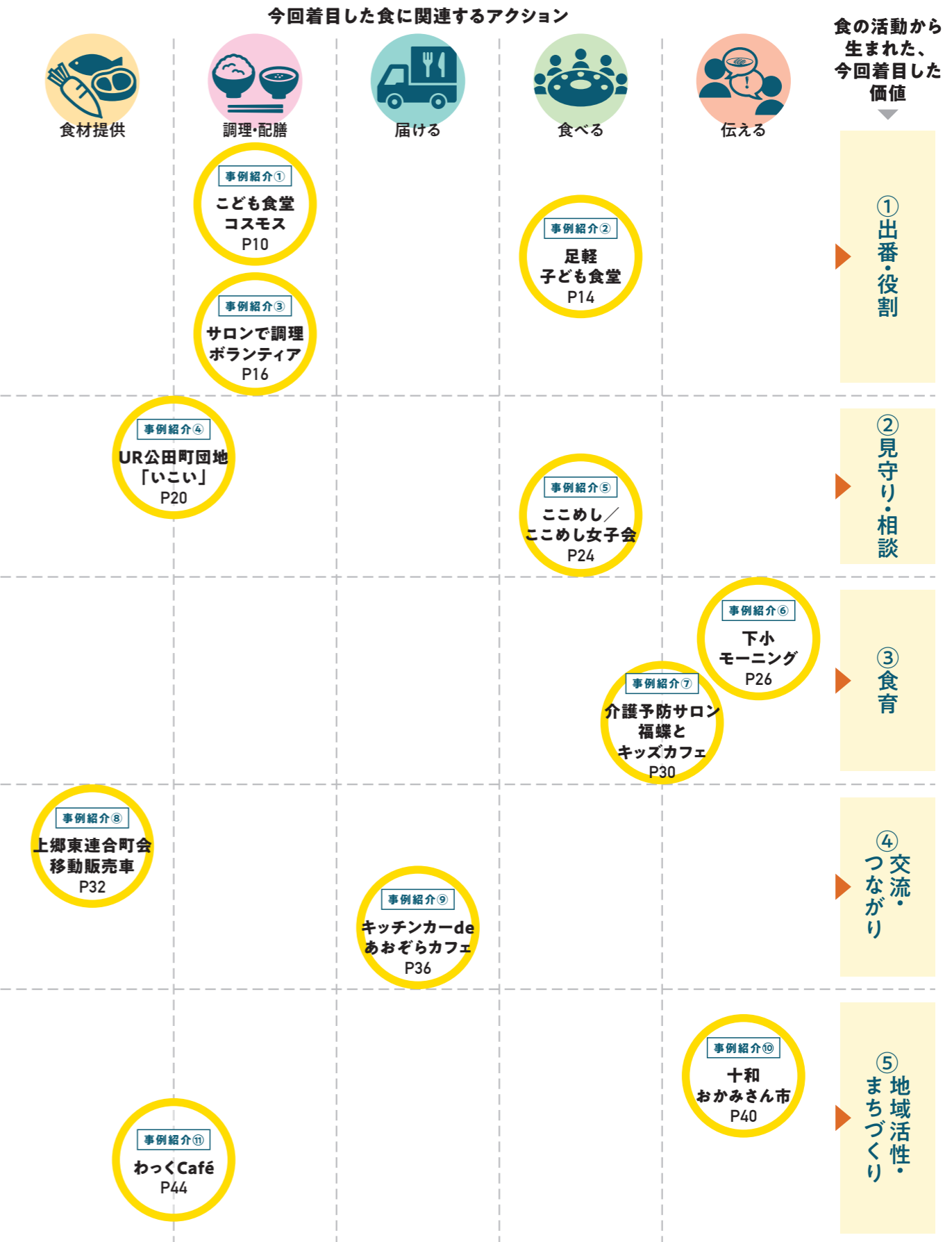
食
×
見守り・相談

食
×
食育

食
×
交流・
つながり

食
×
地域活性・
まちづくり

食に関連するアクションでのマッピング



食に関するアクションは「食べる」を柱として様々ありますが、今回は5つのアクションに着目しました。また、食の活動から生まれる「価値」も様々ありますが、今回は5つの項目に着目しました。本ガイドブックで取り上げた取り組みは様々な要素をあわせ持っていますが、このガイドブックでは上記のアクションや価値に着目してご紹介しています。

アセット重視の考え方

アセット重視の考え方は、健康・福祉の分野で、専門家主導に対する反省と、住民の力への着目から生まれてきたものです。

専門家主導の考え方では、「ないもの」(弱み、できないこと)が焦点となります。とりわけ、急を要し、重大なものが優先されます。病気や身体・認知機能が低下した、またそのおそれがあると判断される場合に、必要なサービスが提供されます。これは、問題を抱えた人に的を絞って、サービスやお金などの資源を集中的に投入するという手法です。必要の有無や大小について判断を行うのは専門家です。

専門家主導の考え方が想定する住民像は、サービスの受け手です。住民は消費者の立場に置かれ、主体的な参加の度合いは低くなります。また、取り組みの時間幅は、問題が解消されるまでの期間に限られます。さらに、サービスを評価する際には、客観性が重視されます。「なぜ病気になるのか?」、そして「いかにして素早く治療するか?」が、専門家主導の考え方の基本的な問いです。

これにたいして、アセット重視の考え方は、「あるもの」(強み、できること)に目を向けます。アセットは次のように定義されます。「個人、家族、コミュニティが自由に使える集合的な資源であり、健康に対するマイナスの影響から人々を保護し、健康・福祉を向上させ、生きる上での選択肢を拡大させるもの」*1。

この意味でのアセットは、物やお金に限定されません。誇り、熱意、自信、有意味感、目的、楽観性、首尾一貫感覚といった心理的な資源や、知識、経験、技能、社会関係資本といった社会的な資源も、大切な構成要素です。そして、アセットが集合的な資源であるという点も見逃せません。それらは、隣人や友人との「つながり」(関係性)のなかに蓄えられることによって、力を発揮します。

アセット重視の考え方の前提には、住民自身が、健康・福祉を維持・向上するための力を持っているという見方があります。想定される住民像は、サービスの受け手や消費者というより、共同で問題の解決をはかる仲間(共同生産者)です。住民参加の度合いは高く、専門家が関わりつつ、住民が主体となって進める場面が多くなります。「なぜ健康になるのか?」、そして「いかにして長く健康を保つか?」こそが、アセット重視の考え方の基本的な問いです。

アセット重視の考え方は、専門家主導の考え方とは対照的です(表1参照)。ただし、両者は対立するものではありません。それらが、いわば車の両輪のように相互に補完しあうことで、社会の健康・福祉が向上するといえます。

表1 専門家主導とアセット重視

	専門家主導	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか?」	「なぜ健康になるのか?」

アセット重視の考え方では、コミュニティに根ざすことや、コミュニティが主導的な役割を担うことが期待されます。ただし、これはすべてを住民まかせにするということではありません。公的機関には、条件を整えるという重要な役割があります(表2参照)。住民自身がすでに有益な活動を行っていることを認識し、住民が重視している価値や、住民が生きている物語を共感的に理解することが、その第一歩です。

表2 アセット重視の考え方にもとづく公的機関の役割 *2

- ①健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。
- ②住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。
- ③住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。
- ④個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。
- ⑤困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。
- ⑥相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。
- ⑦その地域でうまくいっていることの価値を認める。
- ⑧健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。
- ⑨コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。

アセット重視の考え方は、もともと欧州で提唱されました。しかし、アセットという言葉そのものは使われなくとも、共通する考え方にもとづく実践や支援が、すでに各地でひろがりつつあります。皆さんの身近なところにも、その兆しや種を見つけることができるはずです。

*1 Garven, F., J. McLean and L. Pattoni, 2016, Asset-Based Approaches: Their rise, role and reality, Dunedin Academic Press, p.29.

*2 同書、pp.35-36

「事例でわかる 地域アセット活用ガイドブック」(令和3年度厚生労働省老人保健健康増進等事業)より再掲

基本情報の項目

食	取り組みの名称	活動場所	所在地		運営団体の名称	取り組みの概要
食 ⊗ 出番・役割	こども食堂コスモス	お休み処コスモス	福島県本宮市本宮字下町36番地		コスモスグループ	18歳以下の子どもなら誰でも利用できる子ども食堂。高齢女性の体操の会(コスモスグループ)が、得意な調理の腕を活かして高齢者と子どもの交流の場をつくっている。
	足軽子ども食堂	社会福祉法人永井善隣館「足軽の家」	石川県金沢市菊川2-8-13		クラブ足軽	調理から食後の遊びまでシニア男性だけで企画、運営している子ども食堂。こども園や児童クラブともつながり地域で子どもの育ちを見守っている。
	サロンで調理ボランティア	鹿屋市吾平地区内の高齢者サロン	鹿児島県鹿屋市笠之原町7402-5		社会福祉法人 隣の会	コロナがきっかけで始めた配食弁当の運営ノウハウを活かし、食の提供ができない市内のサロンへ調理ボランティアを派遣。
見守り・相談	UR公田町団地「いこい」	URが管理する店舗	神奈川県横浜市栄区公田町団地1-740番地1		NPO法人 お互いさまねっと公田町団地	丘陵地の団地内の空き店舗を拠点にして、コミュニティレストランの運営や食品・日用品の販売をしながら見守り活動をしている。
	ここめし／ここめし女子会	善通寺市地域支え合いセンターここ家の1階生きがい広場	香川県善通寺市生野本町二丁目15番31号		善通寺市社会福祉協議会	生活のしづらさを抱えた方や地域とのつながりの少ない方等が、ボランティアのつくる手作りの食事を介し地域の方々とゆるやかにつながり、自身の得意なことを生かしながら安心して過ごせる居場所。
食育	下小モーニング	下高瀬小学校／太陽の家	香川県三豊市三野町下高瀬760-1／香川県三豊市三野町吉津乙2030保健センター内「太陽の家」		下高瀬地区社会福祉協議会/みの元気塾	地域で活動する高齢者メンバーが小学校で子どもに朝食を提供、食育と見守り、多世代交流を行っている。
	介護予防サロン福蝶とキッズカフェ	運営責任者の自宅のたまたま空き家になった隣家	石川県白山市福留町南174		傾聴ボランティア聴蝶	一軒家の居間で開かれる、楽しく会話ができる赤ちゃんから高齢者までの多世代サロン。みんなで昼ご飯をつくり、食事をしながら交流している。
交流・つながり	上郷東連合町会 移動販売車	庄戸第三北公園	神奈川県横浜市栄区庄戸3-10		上郷東連合町会・社協・ダイエー	買い物不便な住宅地の公園で、週1回行われる移動販売の取り組み。買い物支援に加え、見守りやコミュニティ創出の機会になっている。
	キッチンカーdeあおぞらカフェ	民家ギャラリー結	千葉県柏市松葉町2-12-3		NPO法人ワーカーズコレクティブういず	活動が自粛されるコロナ禍、“キッチンカーでGO!”をキャッチフレーズに弁当配布を通して、地域のお困りごとを聞き出しサポートすることで、地域のつながりを継続している。
まちづくり・地域活性	十和おかみさん市	十和おかみさん市直販所	高知県高岡郡四万十町十川203		株式会社十和おかみさん市	山あいの集落で農作物の生産、加工、販売を一緒に行ってきた女性グループが、郷土料理をつくり販売することで、地域の食をまかない、にぎわいをつくりだしている。
	わっくCafé	金剛銀座商店街内「わっくCafé」	大阪府富田林市寺池台1-9		一般社団法人わっく金剛	誰でもウエルカムの常設拠点を日替わりカフェオーナーで運営しながら、多世代の人が得意を活かせる新たな地域のつながりづくりに挑戦している。

事例紹介

百歳体操グループメンバーが 担い手の「子ども食堂」

こども食堂コスモス [福島県本宮市]

こんな活動

18歳以下の子どもなら誰でも利用できる子ども食堂です。高齢女性の体操の会(コスモスグループ)が、得意な調理の腕を活かして高齢者と子どもの交流の場をつくっています。

運営の様子や特徴

「いきいき百歳体操」は本宮市の介護予防の取り組みのひとつ。コスモスグループは百歳体操受講後の自主グループとして生まれ、同じメンバーが子ども食堂を運営しています。

百歳体操は毎週金曜日。朝から10名ほどが集まり、体操の後は手作りのサンドイッチやすいとんなどで早い昼ごはん。このごはんの時間が翌日の子ども食堂の打ち合せの場になります。子ども食堂のメニューを確認し、午後にはメンバーが運転する車でスーパーへ買い物に行き仕込みを行います。

献立づくりや調理は代表の浦井さんの保育所の調理員時代の経験や、人が来れば手作りの食事でもてなしてきたメンバーたちの主婦の経験が生かされています。寄付で集まった食材での調理もお手のものです。

1回の子ども食堂で60人前のお弁当を作ります(コロナ禍以降はお弁当配布に切り替え)。コロナ禍前は40人以上が集まって食事を共にしていました。

モットーは「できることを、できるメンバーがする」。だれもがやりたいと思った時にできる、出番づくりを心がけています。



基本情報

[名称] こども食堂コスモス

[住所] 福島県本宮市本宮字下町
36番地

[開催場所] (お休み処コスモス)代表が所有する店舗物件

[運営団体] コスモスグループ

[代表] 浦井カツ子

[開設・営業開始] 2019年12月

[活動概要]

・子ども食堂(現在は弁当配布) 土曜日2回 11:00-14:00
参加費 18歳以下無料・大人300円

食数 子ども用40食、その他20食、計60食を用意

・いきいき百歳体操

百歳体操 金曜日4回 10:00-10:30 体操、10:30-11:30

軽食とおしゃべり 参加費200円

おもいを使った約30分の筋力運動プログラムの自主活動。DVDを見ながら行う。

活動を支えるアセット

アセットのつながり

(1)いきいき百歳体操

本宮市が推進しているおもいをつかった30分程度の筋力運動プログラムで、市は説明会や立ち上げ支援を行い、おもいとDVDを貸し出しています。

コスモスグループの百歳体操の特色は体操の後軽食の時間があること。浦井さんは、集まることが第一の目的で、人の集まりには飲食が欠かせないと考えました。体操のあとはゆっくり1時間食事をしながらおしゃべりを楽しまします。この食事の時間が子ども食堂立ち上げの相談の場になりました。

(2)ふくしまこども食堂ネットワークによる支援

こども食堂コスモス立ち上げのきっかけとなったフォーラム「子ども食堂で地域は変わる」を主催したのが「ふくしまこども食堂ネットワーク」です。

ネットワーク事務局の宮川さんは、子ども食堂立ち上げ直後にコスモスの拠点を訪問し、助成金や寄付物資についてのアドバイスをしました。助成申請に不慣れなコスモスに対しては、書類をダウンロードしてFAXするなどの手伝いもしています。県内でも「コスモス」は最高齢メンバーによる活動団体で、60代70代の会員を元気づける存在でもあります。

(3)市や社協の支援と、子ども食堂補助金の制度化

活動開始にあたって浦井さんは社会福祉協議会、市役所にも相談に行きました。社協はチラシの作成と2つの小学校での配布、市役所子ども福祉課はチラシの印刷で協力しています。

市では子育て支援に力を入れていて、2021年度には子ども食堂に対する補助金(子ども食堂活動運営補助事業補助金。月1回以上、1回に10食以上、学区を越えた活動をしている団体に対して1回につき10,000円)ができました。

行政の支援を基盤として、商工会が、子育て世帯や生活困窮者、子ども食堂への支援を目的に、市社協と「フードバンク事業協定」を締結しました。年2回程度、会員企業から食品等を募り、社協に提供する取り組みです。これにより、子ども食堂への食材支援のルートができました。

カギとなるアセット

人	<ul style="list-style-type: none"> 代表で拠点オーナーの浦井さん(保育園給食調理の経験がある) いきいき百歳体操のメンバー
場	<ul style="list-style-type: none"> お休み処コスモス(街道沿いの店舗物件。宅配ピザ店が撤退したのち浦井さんが食堂として使えるように整備した)
モノ・資金	<ul style="list-style-type: none"> 本宮市こども食堂運営補助金(子ども福祉課。1回1万円。2021年度より) 「ふくしま子ども食堂ネットワーク」からの情報で企業からの食品の寄付を受けている。 メンバーが持ち寄る野菜や果物 地元商工会から商品券の寄付
情報・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> 本宮市社会福祉協議会(チラシの作成、小学校での配布、町会での配布) ふくしま子ども食堂ネットワーク(助成金や寄付の情報、県内) 認定NPO法人ふくしまNPOネットワークセンター(子ども食堂立ち上げ時の相談と先輩団体の紹介) 本宮市保健福祉部子ども福祉課 本宮市保健福祉部高齢福祉課(いきいき百歳体操を通じた連携)

活動の背景

コスモスグループの拠点「お休み処コスモス」は、代表の浦井さんが所有する店舗物件で、JR本宮駅近くの中心街、奥州街道沿いにあります。2016年にこの店舗が空いた時に「地域みんなの居場所にできないか」と考え、仲間15人と「百歳体操コスモス」を立ち上げ健康体操を始めました。

浦井さんは保育所調理員の仕事を定年まで勤めあげ調理師免許も取りました。退職後は地域の子どものためにできることをしたいと考えていたところ、2018年に郡山市で行われたフォーラムで子ども食堂の講演を聞き、子ども食堂に興味を持ちました。

2019年、台風による大雨で阿武隈川が氾濫し本宮市中心街が水害に見舞われました。地域の暮らしも様々な影響を受ける中、このようなときだからこそ立ち上げに向けて本格的に動き出しました。

こども食堂コスモスは、コスモスグループの代表を務める浦井さんが2004年から営業をしている「お休み処コスモス」を拠点として実施されています。コスモスグループは、お休み処コスモスで行われる「いきいき百歳体操」の参加者の集まりであり、子ども食堂の運営主体でもあります。こども食堂コスモスでは、地域の助け合い・共助の精神のもと、自分たちの憩いの場を立ち上げた人たちが、いろいろな人たちの協力を得ながら、自分たちの想いを実現させています。ここでは、生活支援コーディネーターのように、地域の活動を支える側の視点から、この事例のポイントを整理してみたいと思います。

コスモスグループの活動の原動力は、「自分たちの得意を生かしたい」、「みんなでゆっくりお茶でも飲める場所を作りたい」という気持ちです。代表の浦井さんやコスモスグループメンバーの「やりたい気持ち」が、地域にとってのアセットであり、いろいろな立場でこの取り組みを支援する人たちを引き付けています。支援をする人たちは、この「やりたい気持ち」を尊重し、その気持ちが途切れないよう、さまざまなレベルで活動を支えています。

百歳体操は、市の制度にもとづいた取り組みですが、コスモスグループにとっては「憩いの場」に仲間が集まるための手段のひとつです。市も、百歳体操そのものを広めるだけでなく、地域の高齢者が助け合いながら活動を行うことが重要、という姿勢をとっています。また、子ども食堂の立ち上げでは、地域の支援組織である認定NPO法人ふくしまNPOネットワークセンターが、すでに子ども食堂を実施している近隣の団体を紹介することで、コスモスグループの具体的な活動に結びつきました。さらに、子ども食堂の具体的な運営については、子ども食堂に特化した支援組織、ふくしま子ども食堂ネットワークが何かにつけ相談を受けています。

百歳体操や子ども食堂を定期的開催するためには、高齢者のボランティアによって支えられた活動とはいえ、ある程度「事業体」としての側面も重要となってきます。この点については、コスモスグループで対応が難しい物品の配送や広報資料の作成、助成金や補助金などの申請書類の作成などは、社会福祉協議会の担当者が支援しています。また、子ども食堂に対しては、市や地域の企業・商工会が、資金面、物品面での支援を行っています。さらに、県内の民間助成財団(福島民報教育福祉事業団)への助成応募を勧めることで、活動の一般的認知を高めることにもつながっています。

既にさまざまな取り組みがなされている地域の居場所や子ども食堂を支援する場合、ともするとまくいっている事例やあるべき姿に近づけるような支援も考えられますが、この事例では、コスモスグループの「やりたい気持ち」を生かし、できることを実現するような支援が行われています。コスモスグループの自立的な活動に向けた、その環境を整える条件整備のような支援です。

コスモスグループの取り組みが行政から認められ、地域や広く一般からの認知を得ることで活動が充実していく一方で、活動の継続にとって懸念されるようなことも見受けられました。例えば、地域の高齢者による助け合いの活動が、介護サービスの提供者としてみなされるようなことです。活動をサービスの提供ととらえ、サービスの提供者と利用者とは分けられるような取り組みでは、地域の助け合いとはなりません。コスモスグループの活動の原動力であり地域にとって貴重なアセットである参加者の「やりたい気持ち」を生かしてこそ、この活動が成り立つのではないのでしょうか。

1 こども食堂コスモス [福島県本宮市] 周辺地区の概要

◎地域概要

本宮市は県の中央に位置する本宮町と白沢村が合併して誕生した市。旧本宮町は古くから交通網が充実し、宿場町として栄えた。コスモスはJR本宮駅周辺の中心部近くの奥州街道沿いにある。近くには阿武隈川が流れ、過去には大きな水害に見舞われた。

◎人口データ [本宮市本宮第一中学校区]

総人口:13,517人
高齢者人口(65歳以上):3,846人
高齢化率:28.5%(令和4年12月)

発想を広げる アセット活用アイデア 1 寄付食材の運搬や保管はどうする?

こども食堂コスモスには米や加工食品、お菓子など様々な食品の寄付の情報が集まりますが、メンバーは高齢のため免許を返納して車の運転ができる人がいません。引き取りができずあきらめたり、タクシーをいかえってお金がかかってしまうこともあります。

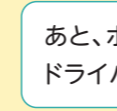
子ども食堂や地域食堂へ企業等からの食材寄付が増えてきている中で、新たな課題が聞かれるようになりました。例えば、食材の寄付はフードバンクなどの中継拠点にまとめて送られることが多く、希望する活動団体はそこまで引き取りに行かなければなりません。しかし、車が運転できるスタッフがいなかったり冷蔵庫や保管場所がないとせっかくの寄付が活用できません。

この課題解決のアイデアを話しあいました。



NPO代表者

まずは、車の運転が得意な団体として「移動サービス」が思い浮かびます。団体さんと一緒に相談に行き、「空いている時間」「OBで活動できる人」等を聞いてみてはと思います。



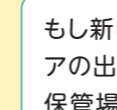
元行政職員

あと、ボランティアで人を乗せるのは躊躇するけれど、「荷物ならOK」と言う人もいますね。「タクシードライバー」さんなどに聞いてみたいですね。



県社協職員

社協では、「ボランティア希望者と活動」を結びつけることをしています。改めて、結びつけられる先はないか、関係者と話しあってみてもいいでしょう。



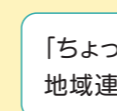
第1層SC

もし新しい人材発掘が必要になったら、講座開催がおすすめです。例えば、「地域食堂でのボランティアの出番と役割」等、参加者が楽しくなるような内容がいいですね。保管場所も考えたいですね。地域内の複数の団体で利用することを考えると保管庫を設置できるスペースがありそうなのは、地域の店舗や企業の敷地内などでしょうか?



子ども食堂主催者

そうですね。私だったら「生鮮食品や冷凍食品を扱う企業」からアタックしてみます。「冷蔵庫」「冷凍庫」「常温食材の倉庫」等の種類別に相談してみます。



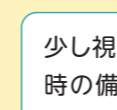
第1層SC

「ちょっとした管理」等もお願いできるといいですね。こうした相談をきっかけに、商店街や企業との地域連携が進むかも知れません。



県社協職員

企業に相談する前に、とりあえず「社協や社会福祉施設」で受け取って保管しているところも多いと思います。



大学研究者

少し視点を変えて、地域の災害用保管施設に着目してはいかがでしょうか。地域には複数の「困った時の備え」があります。寄付食材等も「子どもたちの日常的な困り感への備え」として、「保管場所提供」の協力をお願いできないでしょうか。その際、寄付食材等は各団体のものではなく、地域に寄せられた善意と捉え直すことも大切だと思います。

江戸時代の登録文化財“足軽の家”で 「シニア男性が運営する子ども食堂」 足軽子ども食堂 [石川県金沢市菊川地区]

こんな活動

調理から食後の遊びまでシニア男性だけで企画、運営している子ども食堂です。こども園や児童クラブともつながり地域で子どもの育ちを見守っています。

運営の様子や特徴

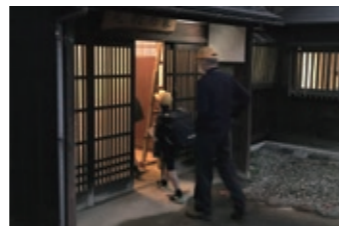
足軽子ども食堂は月1回木曜日の夜開催。事前登録した犀桜小学校児童クラブ2年生の14名が参加しています。ここは2年生だけが参加できる子ども食堂で、毎年参加者を回転させてなるべく多くの子どもに参加してもらいたいと考えています。

食事+遊びのプログラムを運営するのは「クラブ足軽」のメンバー。60～80代のオール男性です。献立はカレーで固定しています。いつもカレーなのは、メニューを増やすと女性に手伝ってもらわなければならないためだそう。カット野菜も活用して自分たちでできる範囲のことをすると決めています。8人のスタッフで、カレー・汁物・盛付け・配膳を分担して行います。材料費は1回5000円以内、米やカレールー等の寄付も活用しています。

17時半前にスタッフが小学校内の児童クラブへ子どもたちをお迎えに。「今日は何して遊んだ？」等と話しながら帰ります。実施主体の善隣館は昔から地域にある福祉拠点で、こども園も運営していることから、安心して子どもを預けられます。終了は18時半で帰りは親に迎えに来てもらっています。

立ち上げ当初は食事の前に「子ども論語塾」をしていましたが、低学年の子どもはなかなか集中できません。始めは理想もありましたが、やってみて子どもを自由にさせることが大切だと気づき、方向を変えました。そのかわりゲームの時間はしっかり準備して勝ち負けやルールも厳格にしています。おじいちゃんがやる子ども食堂なので、ダメダメ主義にはしたくありません。

床の間がある広い座敷での夕食や大らかなおじいちゃんたちとのふれあいは、核家族家庭の子どもにとって非日常の楽しい場所になり、スタッフは子どもとふれあうことで元気もらっています。



基本情報

[名称]	足軽子ども食堂	[活動概要]	男性ボランティアによる子ども食堂の運営
[住所]	石川県金沢市菊川2-8-13	開催日	毎月1回(木曜日)
[開催場所]	社会福祉法人永井善隣館 「足軽の家」	開催時間	17:00～18:30
[運営団体]	クラブ足軽	17:00～17:45	食事
[代表]	新谷寿久	17:45～18:30	遊びの時間
[開設・営業開始]	2016年	参加者	犀桜小学校2年生15人前後
		メニュー	カレー、サラダ、スープ、デザート

アセットのつながり

(1)「クラブ足軽」の男性ネットワーク

「足軽の家」では曜日毎に趣味の講座やサロンが開かれています。女性中心のものが多く男性が参加できるプログラムがありませんでした。そこで永井善隣館の理事長で元開業医の新谷さんが中心となり、男性サロン「クラブ足軽」を立ち上げました。こども園の前園長の上島さんもメンバーで、子ども食堂の事務関係を引き受けています。役割分担や担当制には企業人の経験が活かされ、男性のみの組織の気楽さもあります。

現在メンバーは8名。メンバーを増やすことを考え、店からうどんや寿司をとって月に1回男性のみの昼食会を行っています。地域での交流が少ない男性にいかに参加してもらうかが課題だと考えているそうです。

(2)地域の歴史を感じることができるランドマーク「足軽の家」

国の登録有形文化財に登録されている築160年の木造2階建ての、江戸末期から住み継がれてきた足軽の住まいです。永井善隣館に隣接していることから2009年に法人が購入し、金沢市の補助によって大規模修繕工事を行いました。

地域の歴史を感じることができるランドマーク的な建物で、漆喰の壁、広い玄関のタタキ、古い梁等も子どもたちにとっては珍しく、足軽子ども食堂の大きな特徴になっています。

カギとなるアセット

人	・クラブ足軽メンバー(地域のシニア男性、善隣館役員、民生・児童委員もメンバー)
場	・足軽の家(江戸末期の武士の住まいで、国の有形文化財。現在は社会福祉法人善隣館がサロン等の活動の拠点として地域に開放している)
モノ・資金	・金沢市地域サロン事業助成(永井善隣館の事業として) ・クラブ足軽メンバーからの寄付 ・NPO法人いしかわフードバンク・ネット(子ども食堂で使用する米や調味料のほか、ひとり親世帯に渡す食材の調達) ・足軽の家のキッチン用具(他の高齢者サロンと共用)
情報・ネットワーク	・菊川社会福祉協議会 ・さいおう児童クラブ ・永井善隣館こども園

活動の背景

金沢市の「善隣館」は、戦後金沢市内に設けられた民間の福祉施設で、現在も11か所が残り高齢者福祉事業や保育事業のほか地域での友愛活動、ボランティアの育成活動等を行っています。地域の代表が運営に関わり、多くの住民が活動協力しているのが特徴です。

永井善隣館はこども園の運営のほか、「足軽の家」を高齢者サロンや趣味活動の拠点として開放しています。「クラブ足軽」はシニア男性メンバーが週1回集まって時事の話題等を話しあうサロン。このメンバーでもなにかボランティア活動ができないかと模索していたときに、子ども食堂の新聞記事をみて立ち上げを決めました。

2 足軽子ども食堂 [石川県金沢市菊川地区] 周辺地区の概要

◎地域概要

菊川は犀川右岸に広がる住宅地帯であり、歴史上は名所や繁華街を抱かえる区域であったが、今日では静かな住宅街を形成している。

◎人口データ [金沢市犀桜小学校区 菊川・本田・城南・笠舞]

面積	2.95km ²
世帯数	4,537世帯
総人口	10,072人
高齢者人口(65歳以上)	2,161人
高齢化率	21.5%(令和4年)

「調理ボランティアの派遣」活動を創出して、地域サロン応援

サロンで調理ボランティア [鹿児島県鹿屋市吾平地区]

こんな活動

コロナがきっかけで始めた配食弁当の運営ノウハウを活かし、食の提供ができない市内のサロンへ調理ボランティアを派遣しています。

運営の様子や特徴

調理ボランティア派遣は始まったばかりで、試行錯誤しながらの取り組みです、と第2層SC松元さん。

食事を通じた交流はみんなに喜ばれ効果も大きいですが、食事づくりの負担が大きく、またコロナの影響もあり、実施しているサロンはわずかです。そこで、高齢者向けの食事づくりや大量調理のノウハウがある隣の会と第2層SCが連携し、地域の高齢者サロンに隣の会の調理ボランティアを派遣するサービスを始めることになりました。

一回目はサロン参加者が持ち寄った食材で隣の会ボランティアが料理を作り、サロンに届けました。隣の会とサロンのボランティアで盛付け、配膳を行いました。(メニュー:混ぜごはん・から揚げ・豚汁・酢の物)。

二回目は調理ボランティアがサロンを訪問して調理を行いました。家庭では作らない中華料理のリクエストに応え、サロン代表者からは「参加者とゆっくり話げできたのがよかった」との感想をもらいました(メニュー:八宝菜・かき玉汁)。

この取り組みがめざすのは、サロンが協力者と連携して食事提供のノウハウを積み重ねること。経験を積んだサロンが他のサロンをサポートする等、サロン同士が協力し合う土壌づくりをめざしています。



基本情報

[名称] サロンで調理ボランティア
 [住所] 鹿児島県鹿屋市笠之原町 7402-5
 [開催場所] 鹿屋市吾平地区内の高齢者サロン
 [運営団体] 社会福祉法人 隣の会
 [代表] 理事長 齋藤鈴子
 [開設・営業開始] 2021年6月

[活動概要]
 ・ふれあいサロン川西 (隣の会の事業。コロナ流行により休止し「お弁当の結」に移行) 2020年まで毎月第4木曜日に食事を提供して開催。参加費300円
 ・「お弁当の結」(隣の会の事業) 毎週火曜日に夕食弁当の配食(登録代100円、配食弁当500円、前払いチケット制) 1回あたりの配食数:30食
 ・「サロンで調理ボランティア」(隣の会とSCの連携による取り組み) 吾平地区内の高齢者サロンに「お弁当の結」ボランティアを派遣して食事を提供する。

活動を支えるアセット

アセットのつながり

(1)コロナ禍をきっかけに始動した「お弁当の結」事業

月1回実施していた隣の会の自主活動「ふれあいサロン川西」が休止となり、参加者の中で特に見まもりが必要と感じていた5名へ弁当配達をしたことから始まった配食活動です。空き家の提供を受け、隣の会のヘルパーやヘルパーのOGがボランティアとして参加、調理や配達を担当しています。食べる人の喜ぶ顔を思いながら作る美味しいお弁当は利用者・家族からも大好評。手作りの食事が喜ばれるのは活動者のやりがいになり、高齢になった隣の会スタッフの新たな役割づくりとしても適しています。

(2)SCと助けあいNPOが連携する生活支援体制

隣の会代表の齋藤さんは、鹿屋市の生活支援体制整備事業のアドバイザーでもあります。SCがキャッチした地域の課題に具体的な解決策を提案し、SCと一緒に仕組みをつくっています。

今回の調理ボランティア派遣では、第2層SCがサロン運営者と3回協議を重ねて、どうしたらサロンで食の提供ができるかを相談しました。また、依頼する団体と派遣されるボランティアとの間ですれ違いがないように、隣の会代表とも相談を重ねました。

1回目が成功したことで「サロンで調理ボランティアお弁当の結」の申込みシートを作成しました。サロン活動を対象にした仕出し屋というイメージにならないように、サロン運営側でできないことをボランティアとしてサポートすることに徹し、任せきりにしない工夫も大切だと考えています。

(3)サロンでの会食会の再開の背中を押した医師会包括の助言

コロナ禍で全国的に食べる活動が停滞する中、鹿屋市においては医師会が組織基盤にある包括支援センターが食に関する活動を実施の際の対策と注意点をしっかりと伝えました。感染の心配から何もかも中止にするのではなく、実施するならばこのように行いましょうという指針があったことが活動再開の背中を押しました。

カギとなるアセット

人	・隣の会の助け合い事業のヘルパーがボランティアとして協力。
場	・隣の会「お弁当の結」拠点(代表 齋藤さんの実家物件) ・吾平地区の高齢者サロン
モノ・資金	・日本NPOセンター助成金(コロナウイルスの影響を受ける住民参加型在宅福祉サービス支援助成) (「お弁当の結」の調理器具等初期整備に関して) ・サロンでの食事代として利用者から500円徴収し食材費に充当。 ・野菜や果物は持ち寄り品を利用。
情報・ネットワーク	・鹿屋市医師会(受託する地域包括支援センターに第1層SCが配置されている) ・第2層SC松元さん(吾平地区担当。地域包括支援センター所属。「サロンで調理ボランティア」のしくみを隣の会代表の齋藤さんとつくった) ・末次サロン、池久保サロン(町会単位の高齢者ふれあいきいきサロン)

第2層SC…地域サロンで食を通じた交流活動を行うため、地域サロンと隣の会(調理ボランティアを派遣する団体)の間を調整している。

活動の背景

隣の会は1999年に任意団体として活動を開始。「困ったときはお互い様。助けたり助けられたり」を理念として有償ボランティアによる家事援助活動を行ってきました。2001年にNPO法人隣の会となってからも助け合い活動を広めるために、サロン活動や喫茶等の地域が集う活動を行なっている。2022年2月に社会福祉法人へと移行し、現在は介護保険事業や障害者支援サービスを展開しながら、活動当初からの助けあい事業も行い、食事づくりのノウハウも豊富です。

隣の会ではコロナ感染予防のため2019年以降会食会を休止しましたが、代わりに見守りを兼ねた配食活動を新たにスタートしました。一方で市内のサロンはコロナの影響や担い手の高齢化で活動が停滞していることや、調理の負担が大きく食事の提供が難しくなっていることが課題となっていました。

この事例から学ぶポイント

地域サロンからは、会食やお茶菓子を囲んだ参加者同士の和やかな交流の情景が浮かびます。コロナ禍ではそのような空間と機会の多くが途絶え、食活動に付随する様々な役割も参加者から奪うこととなりました。その一方で、感染症の不安と対峙しながら、参加者の日に日に元気がなくなっていく様子や再開を期待する声に焦りや危機感を感じつつ、継続の道を模索してきたサロンも存在していました。隣の会の「調理ボランティアの派遣」はそのような中から生まれた活動です。

この事例から学ぶポイントとして2つ挙げたいと思います。一つ目に「活動のつなぎ直し」です。鹿屋市でもコロナが落ち着き少しずつサロン活動が再開しましたが、会食など食を通じた交流の姿が少なくなっていました。コロナ禍に加え、地域サロンでの加齢に伴う活動の縮小など、食べることの楽しみや食卓を囲み笑顔になる機会が地域から減っていたのです。加えて再開したくてもwithコロナ対応といった新たなハードルもあります。以前はあった活動、「気持ちはあるけど、ノウハウや担い手がない、応援してくれる存在がない」、地域サロンには、「やってもらいたい」ではなく、「やれるようになりたい」というニーズが存在していました。

これらの課題を見聞きた隣の会の齋藤さんたちは、食を通じた住民同士の交流で笑顔で元気になることを目的に、「あるもので、できることから」と、会食の機会を検討する地域サロンへSCさんを介した調理ボランティアの派遣を始めます。不足しているところは、地域からできる人・やりたい人が出てくるまで調理ボランティアが「活動のつなぎ直し」をお手伝いしていきます。その際に協力する側の作法も重要になります。単なる地域サロンを対象とした仕出し屋にならないよう、派遣先の主体性を応援する関わりを心掛けます。一緒に活動しながら伸びしろを楽しむ姿勢が大切です。

二つ目は、「コツの取り分け」です。注目される先駆的な活動の多くにはスーパーマンの存在があります。あの人だから、あの設備があるからと、つい自らの環境と比べてせっかくの学びを活動に活かさない経験をしたことはないでしょうか。この事例には、先駆的な事例からコツをうまく取り分けて活用したうまさがあります。

食活動を分解してみると、献立・買い物・調理・配膳などの工程ごとの役割や利用・参加方法などの仕組みがあります。隣の会の齋藤さんたちは惜しみなく、手順書や様式など実際に使用している仕組みやコツを提供します。「そのまま活用」、「工夫が必要であれば応用」と、その地域サロンの実情や強みをよく知るSCさんとともに取り分け加減を模索します。その中で生まれたのが、何をどこまで協力してもらいたいかを事前に聞き取る「申込シート」の開発と「SCを介したマッチング」の仕組みです。地域サロンにも「調理できるようにしたい」「献立と一緒に考えて」「買い物は自分たちで」など様々なニーズがあります。SCさんが打合せを通じてできること、手伝ってもらいたいことを申込シートを使って目的と役割を明確することで、当日は純粋に活動を楽しみあうことができます。

この事例でのSCさんの特徴は、初期段階のマッチングに見て取れます。双方の事情や思いをよく知る存在としてうまく立ち回り、ミスマッチがないように伴走し、行政栄養士による献立助言を絡めるなど、行政との連携の強みも活かします。地域サロンの主体性を大切に「活動をつなぎ直す」機会を見つけ、先駆的な事例から「コツを取り分ける」ことで、住民主体の活動にひろがりを生み出しています。

後日談として、派遣後に地域サロンから「結」に見学があり、調理ボランティアとの交流を深めたり、当日参加した行政職員が活動を全国でポスター発表して表彰されたりとその後の反響につながったそうです。地域サロンは他団体からの協力をうまく取り入れたことで自らのアセットを増やしていきました。この経験をもとに自らのアセットを他の地域のサロンに役立てたいと協力のバトンが自然と地域の中で回りだす、この事例からはそのような魅力的な地域の未来が感じられました。

3 社会福祉法人 隣の会 [鹿児島県鹿屋市] 周辺地区の概要

◎地域概要
鹿屋市は大隅半島のほぼ中央に位置し、古くから大隅地域の交通・産業・経済・文化の拠点。温暖な気候や豊かな自然環境に恵まれ、全国でも有数の食料供給地である。

◎人口データ [吾平(あいら)地区(第2層圏域)]
面積:59.15km²
世帯数:2,968世帯
総人口:6,144人
高齢者人口(65歳以上):2,340人
高齢化率:38.1%(令和3年)

発想を広げる アセット活用アイデア 2 お手本となる活動を、広域で展開していくには?

「隣の会」には、会食会の活動に取り組んできた長年の実績があります。衛生管理をはじめ大人数への対応や、高齢者向けのメニューづくり等のノウハウを持っており、コロナ禍を経ていち早く配食活動を再開させた、お手本となる取り組みをしています。

食の活動をなかなか再開できない団体への支援として、調理ノウハウを持つ「隣の会」メンバーを調理ボランティアとして派遣して、サロンでの食事提供を実現させました。

この事例のように、お手本となる活動や新しいアイデアを広域全体で共有できないかと考えることも多いでしょう。

広域で情報共有をしたり、助けあったりしていくには、どうしたらいいのでしょうか?

この課題解決のアイデアを話しあいました。



行政職員

第1層協議体レベルでフォーラムやサミットを開催し、モデル的な活動を発表してもらうことで、他地域の方にも共有することができます。自分の地域での課題に活用できるか等のワークを実施すれば、広域全体での活動のブラッシュアップにつながるでしょう。



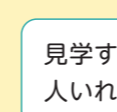
県社協職員

事例紹介をする際、活動の成果だけでなく、経過や関わった人・団体、何につまづき改善してきたか等のプロセスをSCの視点でまとめることが大切かなと思います。必要としている地域や新たな風を吹き込む必要性を感じている地域に、視点を整理したものを発信できると効果的です。



子ども食堂主催者

お手本となる活動の人に他の活動に出かけてもらい、話をしていく中で興味を持ってもらいお手本の活動を見に来てもらうようにするのはいかがでしょうか。



元行政職員

見学する時のコツがあります。1人では「勉強」で、2人では「どうしよう」と悩みで止まりがちですが、3人いれば「何とかしよう」と動くことが多いです。3人で行くことをお勧めしましょう。



第1層SC

市町村全域で、活動者同士の情報交換の場を作ったり、第2層協議体エリアごとに住民から住民へ活動のプロセスを伝える場を作れるといいですね。



大学研究者

各活動の強みと課題を把握し、相互に協力できないかを探したいですね。課題を乗り越えたエピソードや活用した資源等をSCがリストアップして、蓄積・共有していくことが大切です。また、モデル的活動が用いているシートやチラシ等のフォーマットがあれば、提供してもらえるといいですね。他地域で立ち上げる際、一から創りあげていく負担を少しでも軽減できます。

団地の空き店舗で 「食品販売と日替わり定食提供」

UR公田町団地「いこい」 [神奈川県横浜市栄区]

こんな活動

丘陵地の団地内の空き店舗を拠点にして、コミュニティレストランの運営や食品・日用品の販売をしながら見守り活動をしています。

運営の様子や特徴

「いこい」は急勾配の坂道が続く公田町団地の中心、バス停前にあります。ガラス張りの店舗は明るく、入り口には採りたての野菜が並び、緑豊かなテラス席もあります。

店舗内には、トイレトーパーや洗剤、インスタント食品・パン・お菓子・牛乳等の飲料や、スタッフの故郷から取り寄せた米や旬の果物が並びます。週1回のあおぞら市では、近隣の農家の野菜や障害者施設の弁当のほか、地元スーパーから購入した肉や魚も扱います。

商品にわずかなりべートをのせて販売しNPOの収益にしています。売れ残った場合はスタッフが買い取って回転させます。

ランチの提供は週4回。日替わり定食・カレー・うどん・チャーハン等、すべて500円以内で食べられます。毎回30食程度を用意します。食事以外でもコーヒータイムや友人とのおしゃべりに施設を利用できます。

拠点からは団地の通りが見渡せ、見守り活動に最適な環境です。「いこい」運営スタッフは来所した人への声かけや緊急対応をしています。



基本情報

【名称】 UR公田町団地「いこい」
 【住所】 神奈川県横浜市栄区公田町
 団地1-740 番地1
 【開催場所】 URが管理する店舗
 【運営団体】 NPO 法人お互いさまねっと
 公田町団地
 【代表】 有友フユミ
 【開設・営業開始】 2010年4月

【活動概要】
 ・あおぞら市(2008年10月～) 毎週火曜日 10:00-15:00
 ・買い物支援(日用品販売 月・火・水・木・金)
 ・ミニ食堂(月・水・木・金の11:30-13:00)
 麺類、定食等 350～500円
 ・交流サロン
 気功、ヨガ、麻雀など(現在コロナのため休止中)

アセットのつながり

(1) 団地で一緒に子育てをしてきた仲間

10名のいこいの運営スタッフは、昭和の時代から団地に住み、子育てやPTA活動、スポーツを共にしてきた仲間です。団地で実施してきたお祭りなどのイベントの経験が「あおぞら市」のアイデアに活かされました。メンバーには高齢化や孤独死などの団地の課題に向き合ってきた民生・児童委員や自治会役員の経験者もいます。その経験から、「いこい」はコロナ禍の中でも休まずに時間短縮の工夫で対応しました。

(2) UR団地内の店舗スペースが見守り拠点に

2009年、スーパーやコンビニが撤退した空き店舗が見守りの拠点「いこい」になりました。食堂・販売・交流のスペースや厨房施設などを整備するにあたっては、厚生労働省「安心生活創造事業」や「地域介護・福祉空間整備等交付金」が活用されました。

物販や食堂に加えて、一人暮らし世帯などの見守りを定期的に行う安心センターが特長でしたが、2019年度で市からの委託事業が終了しています。高齢化が進む団地には見守り機能が不可欠で、今後どう維持していくか行政やURとの協議が課題になっています。

(3) 「見守り会議」等、SC、地域包括、民生・児童委員等の連携体制

「いこい」で行われる月1回の「見守りミーティング」は第2層SCが事務局を担当し、地域包括職員、民生・児童委員(団地から4名)、行政の高齢障害支援課、生活支援課、見守り支援員(「お互いさまねっと」から3名)が参加して行われます。この会議でそれぞれが関わっているケースを共有します。団地の中や「いこい」で気になっている人を伝えたり、気になる人を「いこい」で紹介する等の連携ができています。

第2層SCの矢澤さんは、いこいメンバーとできるだけ顔を合わせて最低でも月3回(会議、議事録のお届け、広報誌のお届け)は訪ねることで関係を深めています。

カギとなるアセット

人	・NPO法人お互いさまねっと「いこい」運営スタッフ(民生・児童委員や青少年指導員の経験がある人も)
場	・団地内店舗(URのコミュニティスペースとして家賃無料) ・店舗前のオープンスペース(あおぞら市の開催場所) ・店舗に隣接する広場、ベンチ(ピアガーデンの開催場所)
モノ・資金	・いこいスタッフのふるさとから取り寄せる産直品、スタッフの知り合いの農家から仕入れる野菜、福祉作業所の惣菜や弁当、スーパーの日用品(配達してくれる) ・厚生労働省「安心生活創造事業」「地域介護・福祉空間整備等交付金」、横浜市「一人暮らし世帯等安心生活支援モデル事業」「地域の見守りネットワーク構築支援事業補助金」
情報・ネットワーク	・第2層SC矢澤さん(桂台地域担当。いこいで行う「見守りミーティング」の事務局のほか、後方支援を行う) ・桂台地域ケアプラザ(保健と福祉の拠点として地域ごとに設置された横浜市独自の施設。地域包括支援センター機能があり、第2層SCも配置されている)

第2層SC…地域住民へ「いこい」の紹介、「いこい」フリースペースを使った介護予防講座の企画運営、見守り会議の事務局等で連携している。

活動の背景

1996年に団地の中心にあったスーパーが撤退、その後入ったコンビニも2007年に閉店しました。坂道の上下りで買い物は不便になり、店の灯りが消えた団地は住民同士の関わりも希薄になっていました。ひとり暮らし高齢者の孤独死も相次ぎ、公田町団地は栄区の孤独死予防モデル事業の地域に指定されました。

2008年、栄区役所から自治会、民生・児童委員に「見守り活動」について声がかかり、「お互いさまねっと公田町団地」事務局が発足しました。

同年区役所が開いたタウンミーティングでは困りごとを相談できない人がいることや、買い物困難の地域の課題が話し合われ、「お互いさまねっと」は相談事業とあおぞら市の開始を決めました。

小高い丘の上にある1,000戸余りの団地の中央に交流拠点いこい(以下、いこい)が開館したのは2010年です。そのとき直面していた課題は、コンビニの撤退によって買い物が不便になったことと、1964年から入居が始まった団地の高齢化率が50%を超えてかつてよりもお互いの顔がみえなくなってきたという実感です。2008年に活動が開始し、その翌年にNPO法人お互いさまねっと公田町団地が設立されますが、そこでの中心メンバーは、長年同じ団地に住み、子育てやPTA、自治会活動等を一緒に行ってきた仲間たちです。2008年に区の声掛けで実施された5回のタウンミーティングは、この仲間たちがいこいでの活動の起点となるアセットとなっていくことを推進した取り組みといえるでしょう。

そして、住民へのアンケートの結果をふまえた検討を経て採用された手法があおぞら市です。あおぞら市は、PTA活動や地域のイベントでは、比較的馴染みのあるレパトリーといえるでしょう。比較的ハードルが低く、いろいろな人に出番があり、メンバー以外の人と交流できます。加えて、商品選びの楽しさや仕入れを通じた交流の広がりもあります。仕入れ先は、区内のスーパー、隣接市の農家、障害者団体の総菜などです。また、いこいの一角を占める「街の雑貨屋さん」で、日用品やインスタント食品とともに並んでいる米や野菜、果物などは、団地に入居した住民のふるさとや地方に住む知人、旅先で見つけたお店などからの取り寄せとなっています。

あおぞら市や街の雑貨屋さんといった買い物支援や食事や飲み物のある交流サロン等を通じた住民との継続的なかわりには、住民のちょっとした変化に気づく見守りの場となっています。また、当団体には民生委員・児童委員や見守り支援員をしているメンバーがおり、各棟の各部屋の様子や郵便ポストの状況、道路でのあいさつや声かけといった地域での見守りを行っています。これらいこいの内外での見守りの気づきは、生活支援コーディネーター、地域包括支援センター、区の高齢者担当や生活困窮者担当、障害者担当等の部署につながられています。この連絡は、必要に応じてその都度、直接会ったり電話したりするかたちで交わされるとともに、月に1回、いこいでの見守りミーティングの場で行なわれています。このような身近な圏域を単位として当団体と公的機関との間でインフォーマルおよびフォーマルなかたちで連携がとられている背景の一つには、地域ケアプラザという横浜市が地区ごとに設置している独自の施設があります。当団体が連携している生活支援コーディネーターや地域包括支援センターも地域ケアプラザを拠点としています。当団体がある栄区の場合、人口12万人の区内に7か所設置されています。

最後に、活動の開始と継続にあたって、ソフト面・ハード面における公的機関の連携に触れたいと思います。ソフト面は、公田町団地が2008年に横浜市地域見守りネットワーク構築支援事業のモデル地区となったことです。この事業は、団地自治会、地域ケアプラザ、区の協働によるもので、そこが団体を生み出すインキュベーターの役割を果たしたといえるでしょう。ハード面は、団体が賃借している施設(いこい)の改装や整備にあたり、国土交通省のモデル事業となったことです。この事業は、都市再生機構(UR)、横浜市の関連部局、栄区の連携がありました。このように「意欲ある住民」の人たちによる取り組みの展開にとって、地域の団体と公的機関との連携とともに、公的機関どうしや自治体の関連部署どうしの横断的な連携も重要な条件の一つといえるでしょう。

4 UR公田町団地「いこい」[神奈川県横浜市栄区公田町] 周辺地区の概要

◎地域概要
公田町団地は横浜市南部に位置する栄区の大規模団地で、起伏の多い丘陵地に造成され33棟1160戸が並ぶ。入居開始は1976年。団地全体で高齢化が進んでいる。世帯数1,100世帯、人口約1,900人。高齢化率はおよそ55%である。

◎人口データ [公田町団地]
世帯数:997世帯
総人口:1,377人
高齢者人口(65歳以上):750人
高齢化率:54.5%(令和4年3月末時点)

発想を広げるアセット活用アイデア 3 助成金等の受給終了後も活動を継続するには?

「いこい」は、団地の中心にある元スーパーを活用した居場所です。当初の改修費やこれまでの見守り事業の運営費は国や市の委託事業や補助金で賄っていましたが、今年度より補助事業が終了し、自主財源での運営を模索し始めました。

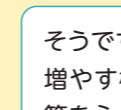
活動を立ち上げる際、場所代や設備を揃えるために、少し大きな資金が必要になることがあります。SCとして、行政や民間企業の助成金の情報提供や申請支援を行うことも多いでしょう。しかし、助成金があっても「最長3年間」等の期限があって、受給終了後の活動の継続について困っているという声があります。

この課題解決のアイデアを話しあいました。



大学研究者

助成金を獲得したら資金があり安心して活動できるうちに、団体が大切にしている事業が運営できるよう足元を固めましょう。助成金が終了したら団体も終了とならないように、助成期間の終了が近づいてから次を考えるのではなく、3年くらい先の出口戦略を考えておく必要があります。



大学研究者

そうですね。助成金は、団体のミッションを確立させることにも活用したいですね。私は、協力者を増やす機会でもありと考えています。SCさんは団体の強みが活かされるフィールドや協力者の紹介等を心がけると良いと思います。

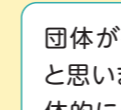


大学研究者



第1層SC

SCは、助成金が終了しても活動を継続している他市町村の取り組みを調べ、情報提供ができるようにしておく方が良いですね。



元行政職員

団体が行政や社協等と信頼関係を構築することで、次につながる情報や支援が得られることも多いと思います。それには、団体がどんな活動をしているのか、日常的に情報を届けることが大切です。具体的には、活動内容をA4版1枚位にまとめ、4半期に1回程度、行政や社協等に届けるように、SCから団体へ提案してみたらどうでしょう。地域のリアルな情報を行政等は知らないことがあります。課長等の管理職に直接届けることをお勧めします。

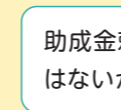


元行政職員



大学研究者

情報発信は、行政や社協だけでなく、地域の人の信頼を得ていくためにも大切です。



大学研究者

助成金頼りで活動を拡大すると、終了時に困ることになります。寄付や会費による自主財源でできることではないか、団体メンバーだけでなく、SCや社協などの関係者で話しあい知恵を出しあってみましょう。



子ども食堂主催者



大学研究者

これまでの活動を振り返り、自分たちが担ってきた役割を、これまで協力してくれた団体等に移すことはできないか、という視点からも検討してみるといいと思います。

食に関する相談先

子ども食堂サポートセンター <https://mow.jp/kodomo/index.html>
ミールズ・オン・ホイールズ ロジシステム <https://mow.jp/mow-ls/index.html>

食を介して ゆるやかなつながりを築く場所 ここめし／ここめし女子会 [香川県善通寺市]

こんな活動

「ここめし」「ここめし女子会」は生活のしづらさを抱えた方や地域とのつながりの少ない方等が、ボランティアのつくる手作りの食事を介し地域の方々とのゆるやかなつながり、自身の得意なことを生かしながら安心して過ごせる居場所です。

運営の様子や特徴

「ここめし」「ここめし女子会」は地域支え合いセンター「ここ家(や)」で行われている取組のひとつ。ここめしは夕方の1時間半ほど開かれている食を通じた居場所で、参加費は200円です。参加者は主に社協の相談に来られた方や関りのある方で、毎回10～20名程の参加があります。普段ひとりで食事をとられている方も、たまには誰かと食事をするだけで嬉しい気持ちになれたり、社協での相談を一旦終えた方も案内や参加を通じて最近の様子を知ることができたりして、地域の中で継続したつながりが持てる場となっています。

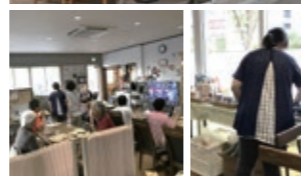
ここ家1階の「日替わりシェフの店なないろ」にシェフとアシスタントとして参加している2名がここめしでは調理ボランティアとして参加。地域の主任児童委員や民生・児童委員もボランティアとして参加し、配膳や盛り付けをします。参加者はボランティアや社協スタッフとの会話を楽しみながら手作りの料理をいただきます。

小さな規模で開催しているため、大人数が苦手な人や声が聞き取りにくい人でも安心して参加できる環境です。

ここめしの開催に向けて、スタッフ・ボランティアで打ち合わせの会を設け、その中で前回活動の振り返りや次回の打ち合わせなどを行っています。参加者の様子や配慮が必要なことなど丁寧に情報共有を行って、開催の日を迎えます。

できたての温かい食事をだれかと食べること、そんな会食会の予定ができることが、参加者の生活の小さな楽しみになっているようです。また参加者が定期的にスタッフや地域のボランティアに会えることにより、ちょっとした困りごとでも話せる関係性が生まれます。

比較的男性が多かったここめしに行きづらかった女性や性同一性障害の方のニーズを捉えここめし女子会を新たに始めました。こちらはサロンのような感じでお菓子やスイーツを囲み、お茶を飲みながら少人数でゆったりと過ごせる場になっています。



基本情報

【名称】	ここめし／ここめし女子会	【活動概要】	
【住所】	香川県善通寺市生野本町二丁目15番31号	・ここめし／ここめし女子会	生活のしづらさを抱えた方、地域とのつながりが少ない方等が会食をしながら食を通じて地域の方々とのつながりをつかきかけを作るとともに、安心して過ごせる居場所を実施。
【開催場所】	善通寺市地域支え合いセンター ここ家の1階生きがい広場	・日替わりシェフの店なないろ	地域住民がシェフとなり日替わりでランチを作り、一般の方に提供するワンデイキッチンを運営。
【代表】	善通寺市社会福祉協議会が運営		
【開設・営業開始】	2016年4月		

アセットのつながり

(1)地域支え合いセンター「ここ家」

ここ家は地域共生社会の実現を目的に善通寺市社会福祉協議会が運営する地域拠点で、2016年の開設以来、地域住民がお互いに支え合える仕組みづくりを推進しています。1階では、「日替わりシェフの店なないろ」や「生きがいひろば」(おりがみ、ぬりえ、手芸、体操、アート教室)の他、誰もが活躍できる場として、地域の方からの90代の方から元気の秘訣の話や介護体験者の話、また福祉の専門家から話を聞ける機会などを企画、発表できる場としての「ここ寄席」、地域支援事業の一般介護予防事業(脳トレ)などを行っています。2階では市の介護予防日常生活支援総合事業の通所サービスを提供しており、通所サービス利用者にも送迎の前後で、希望者にはワンデイキッチンのランチを食べることもできます。

(2)新たな住民主体の活動への広がり

ここ家の活動をいいなと思ってくれた地区社協会長さんへ、「会長の地区でもやってみませんか!」と社協職員から提案。月1回お茶を飲み気軽におしゃべりしながら、困りごとの相談もできる地域の居場所「ミニここ家」の構想が始まりました。この地区のようにここ家のようなふらっと寄れて、相談もできる住民主体の居場所を地域に広めたいと考えています。相談機能をプラスするためには、県社協で推進されている「香川思いやりネットワーク事業(社会福祉法人施設や社協、民生委員児童委員が協働し、様々な生活のしづらさを抱える方を支えるための仕組み)」を活用したり、地域にいる保健師や施設職員のOBに関わってもらったりと、どんなやり方ができるのか検討を進めています。またコロナをきっかけに地域の交流の機会が減りなかなか再開が進まない中、「ミニここ家」構想を通して、社協や公的な機関が積極的に住民の困りごとをキャッチし、アウトリーチの機会の重要性を再確認したそうです。

カギとなるアセット

人	<ul style="list-style-type: none"> 「日替わりシェフの店なないろ」の調理ボランティア 民生・児童委員 ・主任児童委員 相談支援に携わる相談員(障がい者相談支援事業所、ホームヘルパー、ケアマネジャー等)
場	<ul style="list-style-type: none"> 善通寺市地域支え合いセンター「ここ家」 地域の子ども食堂(日常的に連絡を取り合い、人をつなぐ先として連携)
モノ・資金	<ul style="list-style-type: none"> 善通寺市社会福祉協議会の会費 ・赤い羽根共同募金の助成金 フードバンクからの寄付食材
情報・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> 善通寺市社協ネットワーク(住民・地域団体やボランティア) 香川おもいやりネットワーク事業 ・地域ネットワーク会議の参加事業所/相談員等

活動の背景

社協へ生活や仕事、障害に関する相談に来られ、相談を通して支援につながったあるいは仕事ができるようになったという方々に対し、その後も継続して見守り誰かとつながっていると感じてほしいという思いがありました。しかし、「出張相談コーナー」のようなやり方だと実際の困りごとの相談につながりにくいという状況を感じていました。そこで、まずは食べることをきっかけにふらっと行きやすい場を設け、困りごとをつづやける関係性を築いて、そこから相談や支援につなげられる活動として、社協スタッフとボランティアによる会食会が始まりました。

5 ここ家での「ここめし」「ここめし女子会」[香川県善通寺市] 周辺地区の概要

◎地域概要

香川県北西部に位置する善通寺は平安時代より善通寺市を中心に栄え、現在は陸上自衛隊の駐屯地や国立病院、大学など数多くの公共機関がある。

◎人口データ [善通寺市]

面積:39.93km²
世帯数:14,808世帯
総人口:30,702人
高齢者人口(65歳以上):9,866人
高齢化率:32.1%(令和4年4月)

地域のシニアボランティアが「朝食サービス」で子どもの育ちを応援

下小モーニング [香川県三豊市三野町下高瀬地区]

こんな活動

地域で活動する高齢者メンバーが小学校で子どもに朝食を提供、食育と見守り、多世代交流を行っています。

運営の様子や特徴

月曜日の朝6時、地域の常設サロン「みの元気塾」の活動拠点である市保健センター内「太陽の家」キッチンで、朝食の準備が始まります。朝食づくりは「みの元気塾」のボランティア「PASボランティアのみ」と、民生・児童委員、食生活改善推進員からなるグループが分担して行っています。スタッフは各グループ1回に6～8名です。

朝食は7時前に下高瀬小学校の家庭科室に運ばれ、7時15分から「朝ごはんの会下小モーニング」が始まります。「友だちと一緒に食べると楽しいから」と毎回楽しみに登校してくる子、「嫌いだった野菜もここだと食べられる」と言う子もいます。最初は恥ずかしそうにしていた子も大きな声で挨拶ができるようになりました。全校約180名に対し担任の先生経由で申込書が配られて、40～50名の希望者が利用します。メニューはおにぎりかパン、汁物におかず1品。子どもが好きなもの、食べられる量等の検討を重ね、子どもが自分で量を選べるようにしました。昼の給食とメニューがかぶらない工夫もしています。

朝食を食べると授業に集中する、体育を元気に受けることができる等の変化があり、学校側も朝食の時間を大切に考え、協力しあっています。



基本情報

[名称] 下小モーニング

[住所] 香川県三豊市三野町吉津乙2030 保健センター内「太陽の家」

[開催場所] 下高瀬小学校(三豊市三野町下高瀬760-1)

[運営団体] 下高瀬地区社会福祉協議会/みの元気塾

[代表] 永井賢二(下高瀬地区社会福祉協議会会長)

[開設・営業開始] 2022年9月

[活動概要]

・下高瀬小児童を対象とした朝食の提供

日時 月曜(月3回程度) 7:15-8:00

メニュー おにぎりorパン+汁物+1品

参加費 無料

参加者 40～50人/回(全児童数184人)

スタッフ 6～8人(PAS・食改善推進委員会・民生委員)

活動を支えるアセット

アセットのつながり

(1)地域の支えあいネットワーク「みの元気塾」の人的資源

下小モーニングの活動を核となっていて支えているのは町内のボランティアグループ「みの元気塾」です。「みの元気塾」はひとり暮らし高齢者、子どもや子育て中の親、障害がある人等、誰でも参加できる常設の居場所として、配食、親子食堂・子ども食堂、学用品のリユース等の活動を行っています。

みの元気塾の運営の要となっているのが「PAS」というボランティア集団。70代女性を中心に、民生・児童委員や食生活改善推進員の経験がある人たち等が参加していて、下小モーニングの運営でも主導的存在です。

(2)小学校との連携体制

下高瀬小学校は県内唯一のユネスコスクール加盟の小学校で、合鴨農法での米作りや味噌造り等を通して地域との交流を大切にしてきました。みの元気塾代表の関さんは運営協議会委員でもあり、学校との長い信頼関係がありました。

下小モーニングの活動で、「授業に集中できるようになった」「体育でがんばれるようになった」等、良い変化が生まれていることを学校も評価しています。朝食の時間を大切にするように子どもに伝えたり、毎回、SNSを使って保護者へ内容を配信する等、連携しながら取り組んでいます。

カギとなるアセット

人	<ul style="list-style-type: none"> ・みの元気塾の代表関さん(民生・児童委員の経験があり、下高瀬小学校学校運営協議会委員・下高瀬地区社協理事) ・PASボランティア(みの元気塾を支えるボランティア集団) ・民生・児童委員、食生活改善推進員 ・下高瀬小学校の校長、教頭 ・教員(申込のとりまとめ、児童への声掛け)
場	<ul style="list-style-type: none"> ・下高瀬小学校の家庭科室 ・「太陽の家(保健センター)」(みの元気塾の拠点。使用料無料。ここで調理して学校に車で持ち込む)
モノ・資金	<ul style="list-style-type: none"> ・市社協の助成金(食材費・備品・謝金)▶下高瀬地区社協予算(市社協助成金(食材費・備品・謝金)) ・県社協助成金 ・地元企業からの食材
情報・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・三豊市健康福祉部 ・三豊市社会福祉協議会 ・下高瀬小学校 ・地域の集まりの会議録(住民の関心ごとを知るきっかけになった)

活動の背景

三野町では「三野町子育てスローガン(社協の地域福祉活動計画)」で朝食の重要性が謳われていましたが、ある地域の集まりの場で「朝食を食べていない子どもがいる」ことが話題になりました。

一方、社協では、高齢者が元気になるには、子どもたちと交流することが必要と考えていました。

子どもから高齢者まで地域の交流の場として開かれている「みの元気塾」は、居場所で食事の提供や配食活動を行っています。子ども食堂を担当している社協地域福祉推進課の上村さんは、集まりの議事録から地域住民が子どもの食に関心があることを知り、子どもへの朝食提供を念頭に、みの元気塾の配食活動ボランティアに、他県で行われている朝食提供活動の動画を見てもらい、活動のイメージを共有しました。

6 下小モーニング [香川県三豊市]

周辺地区の概要

◎地域概要

三豊市は香川県西部に位置し2006年に7町が合併して誕生した市。県内では高松、丸亀に次いで3番目に人口が多い。江戸時代の街並みや四国霊場・史跡等が残り、観光資源も注目されている。三野町は高瀬川の東西に田畑が広がる農村地帯だが最近では農地の宅地化が進んでいる。

◎人口データ [三豊市三野町下高瀬]

面積:3.99km²

世帯数:1,136世帯

総人口:3,199人

高齢者人口(65歳以上):1,159人

高齢化率:36.2%(平成27年)

発想を広げる アセット活用アイデア 4 学校と連携するには？

下小モーニングの活動は、地域の民生・児童委員や食生活改善推進員、ボランティア活動をしているメンバーが長い間地域に貢献し、また学校とも顔がつながる関係が構築されている上で実現している活動です。

地域には「子どものために何かしたい」と考える人は多く、「学校と連携できないか」という意見はよく聞かれます。一方で、子どもの安全安心を守る視点から考えると、学校側が広く誰でも受け入れることに躊躇することも理解できます。

このような中で、学校と連携するにはどこから始めるといいでしょうか？

この課題解決のアイデアを話しあいました。



元行政職員

まずはPTAの人と知りあいになることから始めましょう。PTAがない時は、学校を取り巻く子ども関連の施設や事業所（児童養護施設、幼稚園・保育園、学童クラブ等）の人と知りあいになりましょう。知りあいになった上で「子どものためにできることがあるか」を相談し、一緒に考えてみるのが良いと思います。

協議体メンバーの中には、ご自身がPTAや学校評議員のような、学校にかかわりのある方もいらっしやいます。そういった方は、地域住民として学校運営に参画していますので、一度相談してみるのも良いと思います。



第1層SC



大学研究者

助けを求めてきた子どもを保護する「子ども110番の家」への協力依頼で、PTAの人が訪ねてくることがありますね。

そうですね。そのような機会も含めていろいろな場面で、学校関係者とお友だちになるための「ひと手間」を惜しまないことが大切です。



子ども食堂主催者



第1層SC

防災に関しては、学校と地域と一緒に取り組みやすいテーマです。具体的には、地域防災訓練を学校にも関わってもらうことから相談してみると良いのではと思います。

団体の活動に学校の協力が必要と思っても、今の学校は本当に多忙で活動に協力するその余裕はないことが多いです。そこで、まずは団体の強みが活かされる領域で「学校が抱えている困りごと・取り組もうとしていること」に協力することから始められないでしょうか。困りごとを手伝ったり頼りになる協力者からの相談には、学校側もきっと耳を傾けてくれるようになるでしょう。



大学研究者

発想を広げる アセット活用アイデア 5 多世代がつながるための工夫は？

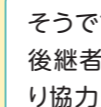
地域活動が活性化していくには、幅広い世代が担い手や参加者としてつながっていくことが求められます。お互いの違いを認めあう多様性が生まれ、新しい気づきを育んでくれる良さがあります。しかし、実際には、若い人たちとどこで出会えばいいのかわからない、どんな活動をする多世代の活動になるのかわからないなどの声を聞きます。多世代がつながるためには、どんな工夫が必要でしょうか？

この課題解決のアイデアを話しあいました。



第1層SC

「子どもの支援」をまん中においた活動は、子どもたちの親や、学校、地域の商店や企業を巻き込んだ活動として発展していくことが多いです。また、高齢者が子どもの支援に関わることで、介護予防・社会参加・生きがいづくりにつながります。子どもから高齢者が助けられる場面も生まれ、お互いに支えたり、支えられたりすることで、多世代に関わる活動になっていくと思っています。



大学研究者

そうですね、子どもの活動に関われるといいですね。若い人や子どものつながりがない団体は、後継者問題を抱えていることを「強み」として活かし、地域の親子を対象としたイベントに取り組んだり協力したりすることで、次の展開が生まれることもあると思います。

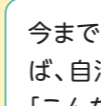


大学研究者



大学研究者

また、相互支援の関係づくりができて活動においては、すでに多様な世代が何らか関わっていることが多いと思います。「利用者、活動者、協力者、支援者」等、関わり方に違いはあれ、共通の活動のなかで「何気ない助かること」を出しあうことを奨励してはいかがでしょうか。助けられる場面が多くなることで、多様な役割が生まれます。助けられる場面が増えることで、支援者という役割を設けなくても運営できるようになると、どんな人でも関わりやすくなると思います。



第1層SC

今まで関わりのない世代と出会うには、今ある活動を変化させることも大切だと思っています。例えば、自治会等で多世代の意見を聞くワークショップを開催してみたいかでしょうか。若い人から「こんなことやりたい」という意見が出たら、自治会と協力して「やってみる」ことも良いのではないのでしょうか。新しい活動にチャレンジする機運をつくることで、何かが生まれてくるのではないのでしょうか。



第1層SC



県社協職員

後継者問題や次世代育成の解決策として、若い人材を自らの団体スタッフに誘うことを考えがちですが、自分の団体ではなくとも、同様の活動を立ち上げた新規団体を地域の後継者として認める考え方も大切だと思っています。

赤ちゃんから高齢者まで、 「世代間交流があるダイニングサロン」 介護予防サロン福蝶とキッズカフェ [石川県白山市福留南]

こんな活動

一軒家の居間で開かれる、楽しく会話ができる赤ちゃんから高齢者までの多世代サロンです。みんなで昼ご飯をつくり、食事をしながら交流しています。

運営の様子や特徴

福留町エリアは、玄関先でも3人寄れば会話が生まれるという元々住民同士の地域交流が盛んな地域です。介護予防サロン福蝶は「デイサービスには行かない人」たちの認知症予防を目的としたつどいの場としてスタートしました。週1回の開催でアットホームな雰囲気の中おしゃべりを楽しみながら、習字や大正琴、筋トレ等のプログラムにも参加できます。

昼食の提供もあります。調理は、ボランティアだけではなくサロン参加者も手伝います。

この場所で行う「キッズカフェ」は、高齢者と子どもたちが一緒に調理をして一緒に食べる活動で、ボランティアも含めると4世代の交流の場になっています。参加するのは特別支援学校の児童や未就学児を連れてお母さん、サロンの高齢者等。コロナ禍中も感染対策をしてみんなで調理、みんなで会食を5年間継続しています。

食に興味がある子どもと、料理上手の高齢者が相互に支えあいながら食事を作る微笑ましい光景が見られます。参加者は口コミのほか、ケアマネジャーや地域包括支援センター、公民館からの紹介でつながった人たちですが、要介護や認知症、障害等の個人的な事情はサロン内では一切言いません。子どもも高齢者も、認知症がある人もない人も、ボランティアも分け隔てなく、参加者全員が「自分ができることをすすんでやる」のがサロンのモットーです。



基本情報

【名称】 介護予防サロン福蝶とキッズカフェ
 【住所】 石川県白山市福留南174
 【開催場所】 運営責任者である五郎川夫妻の自宅のたまたま空き家になった隣家
 【運営団体】 傾聴ボランティア聴蝶
 【代表】 五郎川 外美江
 【開設・営業開始】 2012年(介護予防サロン福蝶) / 2017年(キッズカフェ)

【活動概要】

・介護予防サロン福蝶
 開催日 毎週1回 水曜または土曜 10:00-15:00
 参加費 100円 / 1日 習字や大正琴、体操 等
 食事代 350円
 ・キッズカフェ
 開催日 不定期(チラシ等で事前告知)
 開催時間 9:30-13:00頃
 参加費 大人100円 子ども無料

活動を支えるアセット

アセットのつながり

(1)代表者の隣家、繋がり居場所「一軒家」

遠くに白山の山並みが見渡せるのどかな田園に整備された住宅地にある一軒家です。1階は8畳2間とキッチン、トイレという間取りで、さらに玄関前の広い駐車場はちょっとしたイベントにも利用できるこの場所を無償で借り受けています。畳の座敷は高齢者には馴染みがあり、子どもたちには新鮮です。

(2)多世代交流活動を支える仲間たち

五郎川さんがライフワークの柱として続けている傾聴ボランティアの仲間は、介護予防サロン福蝶を支えるとても重要な存在です。それぞれの人が持つ、防災士、民生・児童委員、ヘルパー、ケアマネジャーといったキャリアにおける経験値が大きな力になっています。警察署とは交通安全や詐欺の注意喚起の講話をしにきてもらう関係があり、参加者の安心につながっています。

カギとなるアセット

人	<ul style="list-style-type: none"> 代表の五郎川さん(介護福祉士、ケアマネジャー、防災士の資格を持ち、傾聴ボランティアとしての長い活動歴がある) 五郎川さんの傾聴ボランティア仲間 金城大学学生ボランティア
場	<ul style="list-style-type: none"> 一戸建て住宅(地域活動の拠点として、無償で貸与されている)
モノ・資金	<ul style="list-style-type: none"> 白山市高齢者通いの場づくり支援事業補助金(1回 5,000円) 白山市こども食堂補助金(1回5000円) 近隣農家からの野菜や米の提供
情報・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> 白山市長寿福祉課 白山市社会福祉協議会、子ども食堂ネットワーク 白山市子ども食堂事業地元応援隊 (運営のボランティアや寄付、食材提供など子ども食堂の応援者を登録し、各子ども食堂に紹介するしくみ)

活動の背景

代表の五郎川さんは介護福祉士、ケアマネジャーの職歴もあり、防災士の有資格者でもあります。長く傾聴ボランティアを続け、いつか何かを地域でやってみたくて考えていました。

たまたま隣家が空き家になったことをきっかけに、傾聴の場を軸とした「高齢者に居心地の良い所」を作ろうと白山市の助成金を活用してリフォームを敢行。『介護予防サロン福蝶』をオープンしました。

今では毎回18名程度が参加、常連とふらっと来る人で賑やかに会食ができるようになりました。

7 介護予防サロン福蝶とキッズカフェ [石川県白山市福留南] 周辺地区の概要

◎地域概要

白山市は県都金沢市の南西部に位置し、人口は金沢市について2番目に多い。山・川・海の豊かな自然に恵まれた地域。

◎人口データ [白山市石川地区]

世帯数:1,838世帯
 総人口:4,531人
 高齢者人口(65歳以上):1,256人
 高齢化率:27.7%(令和4年3月末)

買い物困難地域の生活を支える「移動販売車」と地域交流

上郷東連合町会 移動販売車 [神奈川県横浜市栄区]

こんな活動

買い物不便な住宅地の公園で、週1回行われる移動販売の取り組みです。買い物支援に加え、見守りやコミュニティ創出の機会になっています。

運営の様子や特徴

移動販売車が来るのは毎週火曜日。販売開始の30分ほど前から、町会メンバーが庄戸第三北公園に集まり準備を始めます。時間になると「ダイエー港南台店」と「SELP・社(就労継続支援B型事業所)」の移動販売の軽自動車公園にやって、日用品や野菜のコンテナを並べてあっという間に販売所ができあがります。

ダイエーの取り扱いは、日用品・野菜や肉魚等の生鮮食品・加工食品・惣菜等、実店舗に遜色ない品揃え。スーパーの店内かごが用意され、車に装備されたレジではクレジットカードや電子マネーも使えます。

SELP・社は作業所で焼いた多種類のパンや豆腐・納豆、ジャム等の加工食品を扱っています。障害があるスタッフも接客します。

手伝いの住民は毎回10名以上が参加。町会役員や民生・児童委員のほか、第2層SCも必ず参加しています。販売時間は30分程度と長くはないですが、三々五々集まってきた人々にSCたちが積極的に声をかけ、時には重い荷物は自宅まで運んだりしています。庄戸地区の人々にとって、移動販売はライフライン。地域のしくみとして持続させるためには、なるべく多くの人が利用し買い支えることが必要と、毎回売上金額と参加人数を共有し、必要な人へ声をかけるようにしています。毎回3~40名の買い物客でにぎわっています。

買い物支援だけでなく、交流の場であり、ひとり暮らしの人や気になる人の情報を集めたり、伝える場になっています。



基本情報

【名称】 上郷東連合町会 移動販売車
【住所】 神奈川県横浜市栄区庄戸3-10
【開催場所】 庄戸第三北公園
【運営団体】 上郷東連合町会・社協・ダイエー
【代表】 芦川 弘(上郷東連合町会会長)
【開設・営業開始】 2019年

【活動概要】

- **移動販売** 毎週火曜 10:30-11:00
- **販売場所** 庄戸第三北公園
- **参加店舗** ダイエー港南台店(食品・日用品)・社会福祉法人ル・プリ SELP社(作業所・製パンなど)
- **商品の種類や値段** 値段はダイエー港南台店と同一価格。手数料は1点につき11円で、5点以上は一律55円。肉魚、野菜、日用品など多品目を扱う。リクエストにも応じて、次週に渡している。

アセットのつながり

(1)ダイエーの移動販売モデルの提案を、支えあい活動の仕組みに

栄区の移動販売の事業は、区的生活支援体制整備事業に位置付けています。株式会社ダイエーからの打診から始まり、区、社協、地域ケアプラザで検討を重ねて2019年に仕組みができました。

移動販売の趣旨は①見守り②コミュニティの創出③買い物支援④健康支援の4つ。単なる移動販売ではなく、住民の交流が減少している地域で住民と企業が協働し、買い物を通した生活の充実と新たなコミュニティを創出することが目的です。

栄区社協が窓口となり、買い物不便な地域を重点地域として連合自治会単位で住民に打診し、意欲のある地域から開催日や場所の調整を行いました。ダイエー社だけでなく、ローソンや地域の福祉作業所も加わり、2022年には栄区全7地区19会場で取り組まれています。社協は、公園に移動販売車を乗り入れるための折衝やチラシのポスティング、回覧板での広報等の役割も担っています。

(2)庄戸第三北公園

栄区の土木事務所が管理する住宅地の中の街区公園です。鉄棒などの遊具もありますが、敷地のほとんどが広場になっています。

コミュニティ創出の機会とするために、社協は移動販売の場所を道路ではなく人が集える公園にしています。販売車が公園内に入れるように社協から区の土木事務所への許可申請を出しています。

車止めの鍵は自治会が管理していて、移動販売の日に役員が開けています。公園内の自治会防災倉庫にある長机は商品を並べる台として使っています。

(3)地域の支えあいネットワーク-庄戸の元気づくり

移動販売の活動を支えている人的基盤のひとつが庄戸地区の人々が立ち上げたボランティアグループ「庄戸の元気づくり」です。街開きと同時期に転入してきた住民は、まちづくりや支えあいの意識が高く、空き家を利用したサロンで子育て支援や多世代交流、「くらしの応援隊」としての助けあい活動等を行ってきました。

地域ネットワークがある「庄戸の元気づくり」メンバーには自治会役員や民生委員もいて、この人たちが移動販売の支え手になり、集まった人への声かけや、助けがいる人への手助けを行っています。

カギとなるアセット

人	<ul style="list-style-type: none"> • 上郷東連合町会、庄戸地区の町会メンバー • ボランティアグループ「庄戸の元気づくり」 • 民生・児童委員
場	<ul style="list-style-type: none"> • 庄戸第三北公園
モノ・資金	<ul style="list-style-type: none"> • 軽自動車の移動販売車(ダイエー港南台店) • 折りたたみ長机(町会の防災物品) • 日よけテント(SELP社)
情報・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> • 第1層SC若尾さん(栄区社会福祉協議会に所属。移動販売の事業を統括し、連合自治会や協力企業との調整などを担当している) • 第2層SC(野七里地域ケアプラザ所属。移動販売には毎回参加し、地域理解やアウトリーチの機会になっている) • 株式会社ダイエー エリア推進部 • 株式会社ダイエー 港南台店 • 社会福祉法人ル・プリ SELP社(就労継続支援B型事業)

栄区社協が主体となり、生活支援体制整備事業における「見まもり体制の構築」「多様な主体とのネットワーク構築」の一環として移動販売の取り組みを実施している。

第1層SC…連合自治会への協力要請・関係者間の調整・住民への広報

第2層SC…活動日当日の参加と買い物に訪れた住民への声掛け等

活動の背景

上郷東地区庄戸は栄区の東端の丘陵地にあり、1970年代に開発されました。緑地保全地域に囲まれた自然豊かな住宅地で、区画は整然と整備され、一戸あたりの敷地面積も広いです。

一方、交通の便がよくないこともあり、第二世代の市街地転居も増え、今では栄区内で高齢化率が一番高い地域(75歳以上が7割を超す)となりました。高齢者のみの世帯または独居が多く、車を運転しない高齢者には買い物等の生活の不便が課題となっていました。

この事例から学ぶポイント

地域の人口減少や少子高齢化の進展、それに伴うスーパーなど小売店の縮小・撤退、また、公共交通機関の減便・廃止や運転免許証の返納による交通手段の確保の難しさ、などにより、日々の生活に必要な食料品や日用品の確保が難しくなっている「買い物困難」の状況は、中山間地だけではなく都市部においても年々深刻化してきています。この「買い物困難」の課題に対して全国各地でさまざまな取り組みがなされている中、横浜市栄区の事例は、行政・社会福祉協議会、地域住民、企業が、それぞれの得意を生かしながら協働することで実現した移動販売の取り組みと考えることができます。ここでは、買い物困難という地域の課題を解決するために、多様な利害関係者がそれぞれの立場（「セクター」という言い方もできます）の枠を超えて協働するために必要なこと、という観点からこの事例を考えていきたいと思います。

この買い物困難地域を支える活動は、横浜市栄区にある庄戸第三北公園で、ダイエー港南台店の移動販売車が、週1回移動販売を行うものです。販売時には、住民ボランティアの方々、品出しの準備や片付け、必要に応じて自宅までの荷物運びなどを手伝っています。この公園は、横浜市栄区が管理する市立公園で、移動販売車というクルマの乗り入れができるものではありません。ましてや、民間事業者であるダイエー港南台店が、そこで店舗を開くことは想定されていません。「住宅街にある公園で移動販売を行う」と、ひとことで言い表せてしまうようなこの取り組みも、実現のために克服しなければならない課題があるのです。

この課題を克服し、市立公園という公共の場所で、民間事業者による、本来想定されていなかった取り組みを実現するための工夫としてあげられるのが、移動販売の目的の再定義です。横浜市栄区の事例では、社会福祉協議会と事業者であるダイエー港南台店とが①見守り②コミュニティの創出③買い物支援④健康支援の4つを移動販売の趣旨と定めています。買い物困難者に対する買い物支援だけではなく、福祉的・公益的な意味を明確にすることにより、市立公園で移動販売の実施が可能になっています。現在、移動販売の取り組みはダイエーだけではなく、ローソンやセブンイレブンによって、市営住宅やUR都市機構の住宅でも実施されています。

この事例では、移動販売にかかわる多様な利害関係者が、それぞれの立場で事業の継続に貢献しています。活動の意味の明確化とともに、参加者それぞれの利害を尊重しバランスを取るような意識があるように思います。例えば、いくら福祉的・公共的目的が明確化されたとはいえ、民間事業者による移動販売が継続して行われるためには、純粋な慈善事業ではない限り「採算」を意識せざるを得ません。この取り組みでは、地域住民の参加により、販売にかかわるコストが低減されています。また、ボランティアはそのまま移動販売の顧客でもあることから、売り上げへの貢献も期待できます。地域住民にとっては、買い物困難を解消する手段を自分たちの手で確保していることにもなり、この事業の共有された目的でもある見守り、コミュニティの創出、健康支援にもつながります。その住民にとっての「利益」は、そのまま社会福祉協議会や生活支援コーディネーターの目標達成にもつながるのです。

この事例は、「買い物困難」という課題に対して、その解消に役立つアセットをもつ多様な利害関係者に対して、それぞれが活動しやすい環境を整えることにより、アセットが課題解決のための移動販売の継続的な実施に結びつけられたもの、として位置づけられるのではないのでしょうか。

8 上郷東連合町会 移動販売車 [神奈川県横浜市栄区庄戸] 周辺地区の概要

◎地域概要
庄戸地域は横浜市栄区東部に位置する丘の上に1980年代に開発された閑静な住宅街。1戸当たりの区画面積も広い。近隣に商業施設はなく、最寄り駅までバスで15分。

◎人口データ [庄戸1〜5丁目]
面積:0.752km²
世帯数:1,468世帯
総人口:3,081人
高齢者人口(65歳以上):1,581人
高齢化率:51.2%(令和3年)

発想を広げる アセット活用アイデア 6 企業と連携するときの工夫は？

横浜市栄区の移動販売車の取り組みは、株式会社ダイエーからの打診がきっかけです。窓口となった社協の担当者は、当初、企業との連携は難しいのではと思っていたそうです。しかし、とにかく会って企業担当者の考えを聞くうちに、地域課題となっている「買い物難民」の状況を解決できるのではないかと考え、関係者と協議を重ねて実現に漕ぎ着けました。

この事例では、「地域の受け入れ役」を決めてコミュニティを創出する居場所として展開することで、「みんながよく知っている集まりやすい場所＝公の場所」で実施することができました。

このように企業の力を地域に活かすにはどんな工夫が必要でしょうか。

この課題解決のアイデアを話しあいました。



大学研究者

別セクターの人と関わるということは「違う価値観を理解する」ことです。最初は話が噛みあわないと思うことがあっても、理解しあう気持ちで望むことが大切です。



元行政職員

「地域で活動している団体」と言っても、すぐには企業に信頼してもらえないこともあります。企業側の人を知っている人はいないか、その人を通して担当者を紹介してもらえないかをさぐることも考えてみましょう。つなげてくれた人も、応援者の一員となってくれると思います。



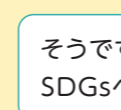
大学研究者

企業との連携といっても、結局は「担当している個人との関係づくり」になります。そう考えると、進め方もわかりやすいのではないのでしょうか。



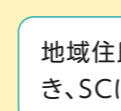
子ども食堂主催者

SCと地域住民とが一緒に話す時間をつくるのが大切だと思います。「来てくれたら助かるよね」「来てもらうにはどうしたらいい？」といった投げかけから始めてはいいかがでしょうか。



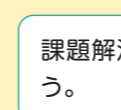
そうですね。企業が、どんな分野で社会貢献をしようとしているのか、ホームページでCSR活動やSDGsへの取り組み等、事前に調べておくとよいと思います。

第1層SC



地域住民の中には、地域企業とのつながりを持っている人も多いです。地域住民側から働きかけて頂き、SCにつないでいただく事も大切ですね。まずは一社からつながるきっかけを探って行きましょう。

第1層SC



課題解決に向け、企業のメリットも考えながら「WIN-WINの関係づくり」を働きかけるようにしましょう。

第1層SC

コロナがきっかけで生まれた 「動く会食会・青空カフェ」

キッチンカーdeあおぞらカフェ [千葉県柏市]

こんな活動

活動が自粛されるコロナ禍、“キッチンカーでGO!”をキャッチフレーズにお弁当配布を通して、地域のお困りごとを聞き出しサポートすることで、地域のつながりを継続しています。

運営の様子や特徴

半円形の黄色い屋根がついたキッチンカーがまちにやって来ただけでも、楽しい雰囲気が広がります。このキッチンカーは、「ういず」が運営する2つの居場所の駐車場や空きスペースにやってきて、お弁当を販売します。キッチンカー内での調理は、衛生管理のための設備投資が間に合わず、キッチンで調理したお弁当を積んでいます。

お弁当を販売するだけでなく、そこで聞いた困りごと等の声を拾い上げ、地域包括支援センターやケア事業所と連携しながらサポートをしています。子どもたちの声を反映させて、鯉のぼりの工作やダンスイベントなども開催してきました。

新たに学童へのお弁当提供を始めたことで、子育て中の若い保護者とのつながりも増え、facebookやLine、QRコード等のIT活用も進めています。また単身高齢者や生活困窮者を対象としたお弁当の配達をおこなっており、こちらでは24時間テレビ助成で購入した車両を使用。提供対象者の情報は地域包括支援センターと共有している。



基本情報

【名称】キッチンカーdeあおぞらカフェ

【住所】千葉県柏市松葉町2-12-3

【開催場所】民家ギャラリー結

【運営団体】NPO法人 ワークスコレクティブういず

【代表】北田恵子

【開設・営業開始】2020年10月

【活動概要】

- キッチンカーdeあおぞらカフェ。移動式居場所づくり。停車時間は1時間程度、1回50食を低額(400円程度)で提供。民家ギャラリー結で飲食しながら、暮らしの相談等。

活動を支えるアセット

アセットのつながり

(1) 休眠預金活用事業助成金でキッチンカーを購入、活用の具現化

休眠預金のコロナ対策助成金で、中古のキッチンカーを購入しリフォームしました。資金分配団体の「公益財団法人ちばのWA地域づくり基金」は千葉県内の活動を資金面で応援する中間支援団体ですが、これまで一緒に活動をしてきたことはありませんでした。

月1回zoomで打ち合わせを行い、「ちばのWA」の伴走支援を受けながら活用計画を具体化していきました。「食事提供」はあくまできっかけで、「会話をかわす」「一緒に楽しむ」といったことが積み重なって、「安心感につながっていく」という活動コンセプトが明確になりました。

(2) 生協との連携で調理拠点を確保

お弁当づくりの調理施設には、生活クラブ生協、生協施設内のキッチンと備品を借りています。ワーカーズコレクティブとして生協との連携体制ができています。

(3) キッチンカーの非日常性、特別感による訴求力

コロナ禍で社会が内向きになっていく中、キッチンカーで街へ出て行くことをしています。黄色いキッチンカーが訪れると、人々が集まります。特に子どもたちに大人気になる「モノ」としての力があり、新しい親子との出会いをつくっています。

カギとなるアセット

人	<ul style="list-style-type: none"> • PTA や生協のつながりの仲間 • 作業療法士(居場所参加者から膝の痛みといった日々の健康相談を受けている) • 民生児童委員、SSW(ういずのメンバー)
場	<ul style="list-style-type: none"> • 空き家を活用した居場所「民家ギャラリー結」 • 住民主体の常設型通いの場 ふれあいカフェ フルトコ(大津ヶ丘) • キッチン(生協施設)
モノ・資金	<ul style="list-style-type: none"> • 休眠預金等活用事業(キッチンカーの購入) • 24時間テレビの助成(弁当の宅配に使っている車両の購入) • 柏市たすけあいサービス事業費補助金/通いの場事業費補助金
情報・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> • 柏市地域包括支援センター • 柏市子ども食堂連絡会 • 公益財団法人ちばのWA地域づくり基金 • 生協 • 市民ネットワーク・かしわ • 柏市子ども福祉課(LINEを使用したキッチンカーの周知協力)

活動の背景

「ういず」は、2004年に協同組合形式で女性6人で立ち上げたNPO法人です。子育て支援や居場所づくりなど、地域のニーズにあわせて様々な事業を展開してきました。

コロナ禍で活動が自粛される中、うつや筋力低下、子どもへのネグレクト等の課題が聞かれるようになりました。「何かできないか」と考えた結果、キッチンカーで屋外に繰り出すアイデアが出ました。

最初に、NPO法人ワーカーズコレクティブういずという名称にある「ワーカーズコレクティブ」について簡単に触れておきたいと思います。ワーカーズコレクティブは、消費生活協同組合(生協)や労働者協同組合などと同じく、理念に賛同した人々の出資により設立されますが、他方でそれらと異なり、出資した人が同時に経営に責任を持つとともにそこで働きます。簡単にいうと、一人が出資者・経営者・労働者のすべてを担う組織形態です。これまでワーカーズコレクティブは、労働者協同組合と同様に、組織の実態に合致する法人格がなかったためNPO法人や企業組合等として活動してきましたが、2022年10月から労働者協同組合法が施行されたことにより、この法律にもとづく労働者協同組合に移行できるようになりました。

ところで、当団体は2020年10月よりキッチンカーでの活動が始まります。この取り組みの背景には、新型コロナウイルス感染症の拡大により、市内の2つの拠点で実施していた高齢者の居場所や子ども食堂、生活支援等の活動が自粛を迫られるとともに、長引くコロナ禍で高齢者の鬱や筋力の低下、子どもたちのネグレクト、困窮者の増加といった新しい課題も見えてきたことがあります。このような中で、人が拠点に來られない状況だからこそ団体の方から出向いて、そして集まらない状況であるからこそ密を作らないためのツールとしてキッチンカーの導入が発案されました。

キッチンカーの強みは、屋外での活動を可能とするだけでなく、場の雰囲気を変える力にあるといえるでしょう。当団体では、いずれも拠点の近くである住宅街の公園や団地商店街の一角のほか、他団体の店舗や葬儀場の駐車場ほかにキッチンカーを登場させ、それらの空間を一時的に居場所へと変えてきました。そこでの主な効果について2つあげたいと思います。1つは、楽しい雰囲気を醸し出すデザイン性をもつキッチンカーが、人の集まりを促し、つながりをつくり、困りごとを拾うという新しいプロセスを生み出したことです。もう1つは、拠点の外で取り組むことにより、当団体の活動が外部の人や団体・企業等に見えるようになり、ボランティアや寄付の増加につながったことです。キッチンカーはコロナ禍での必要性から導入されたツールですが、屋内での活動が可能となった後も引き続き活用できるといえるでしょう。また、このようなデザイン性をもつツールは、必ずしもキッチンカーのような大掛かりなものとは限らないように思われます。

キッチンカーの購入資金は休眠預金活用事業による助成金です。当団体が応募した事業の助成額は一件あたり上限1,000万円(12か月間)と比較的大きな金額で、立ち上げ期の団体向けというよりも、一定の活動実績のある団体が活動の幅を広げるために適していたものといえるでしょう。また、この休眠預金活用事業の募集を行った団体は公益財団法人ちばのWA地域づくり基金という団体です。財団には自治体や企業の主導によって創設されたものが少なくありませんが、当団体は「市民立」の財団で「コミュニティ財団」というタイプです。個人や団体、事業者などから受け入れた寄付金を千葉県内の活動の支援を目的とする大小さまざまな助成事業を実施しています。また、2022年12月には、当団体の事業を含む13事業の成果報告会が公開で開催されました。このような公開でのイベントはさまざまな助成団体で実施されており、そこに参加することは、助成団体とのつながりを作るだけでなく、そこで報告するさまざまな団体や、関心をもって参加する市民・行政等とつながるきっかけともなります。

9 キッチンカーdeあおぞらカフェ[千葉県柏市]

周辺地区の概要

◎地域概要

柏市は千葉県の北西部に位置する。1960年代から東京のベッドタウンとして開発が進み多くの農地が宅地となり人口が急激に増加した。

◎人口データ [柏市松葉町1~7丁目]

面積:114.74km²
世帯数:5,086世帯
総人口:11,183人
高齢者人口(65歳以上):4,476人
高齢化率:40.0%(令和4年)

◎人口データ [柏市大津が丘1~4丁目]

面積:41.99km²
世帯数:3,874世帯
総人口:8,710人
高齢者人口(65歳以上):3,301人
高齢化率:37.9%(令和4年)

発想を広げる アセット活用 アイデア

7 コロナ禍をきっかけにした、 新しいチャレンジは?

「ういず」では、コロナ禍で屋内での会食が中止になる中、どうにかして地域とつながり続ける方法はないかと考え、キッチンカーを活用することにしました。実際に取り組んでいくと、キッチンカーの中で調理をするには予想以上に資金がかかることがわかり、弁当配布になりましたが、見た目がとても可愛いキッチンカーがまちにやってくることで、地域の人とのつながりが継続されたり、新しいつながりが生まれたりしています。

コロナ禍の影響で屋内での会食等、多くの地域活動が中止や縮小を余儀なくされるなか、どんな状況であっても人と人との交流への欲求は強いことが再認識されました。

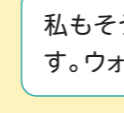
コロナをきっかけとしたチャレンジも各地で始まりました。これまでとは形を変えた、新しい取り組みはどんなものがあるでしょう。

この課題解決のアイデアを話しあいました。



元行政職員

散歩を中心とした活動に切り替えるのはいかがでしょうか。花や大木がある公園や通り、魅力あるお店をめぐる散歩コースを、距離は長短つくります。日時を決めて一緒に歩くのも、各自が好きな時に歩くのもOK。定期的に集まり、散歩コースで見たものを話したり、スマホで撮影した写真を見せあったり、時には屋外で会食もできるといいですね。



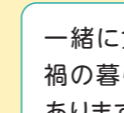
子ども食堂主催者



第1層SC

私もそう思います。膝への負荷が軽くなるポールを使った「ノルディックウォーキング」もオススメです。ウォーキングの後は、お茶を飲みながらおしゃべりもしたいですね。

確かに、屋外の活動は増えていますね。特に、地域の遊休農地や、畑までいなくてもちょっとしたスペースを活用して「花畑や野菜づくり」をしている団体が増えていると思います。そこで採れた野菜で屋外会食ができたらいいですね。また、発想の転換で、ガレージを居場所にした事例もあります。ガレージの中に本を置き、誰もがふらっと寄れるようになっており、時には、お茶やお弁当を一緒に食べたりしています。



NPO代表者



第1層SC

一緒に食べることは人と人をつなぐ本当に大切な活動ですが、食べることから切り替えて、コロナ禍の暮らし方、口腔ケア体操、脳トレ等、健康づくりを中心にみんなで一緒にできることはたくさんあります。

コロナ禍での食活動は難しいと思いますが、全くないわけではありません。感染対策が万全にされている企業の食堂をお借りして、食のある居場所づくりをしている活動もあります。考え方を柔軟に、地域のいろいろな食の活動にアンテナを張っておくと、情報をキャッチできるかも知れませんね。

「農家の女性たちがつくる ふるさとの料理」で地域活性 十和おかみさん市 [高知県四万十町十和地区]

こんな活動

山あいの集落で農作物の生産、加工、販売を一緒に行ってきた女性グループが、郷土料理をつくり販売することで、地域の食をまかない、にぎわいをつくりだしています。

運営の様子や特徴

美味しそうなお惣菜がパックに詰められテーブルに並ぶお昼どき、十和おかみさん市直販所には次々と高齢者がシニアカーや軽トラックで買い物にやってきます。並んでいるのはお惣菜、お弁当のほか、自家製の野菜や米、梅干し・味噌などの加工品、花や野菜の苗もあります。1日でお弁当200食以上約10万円を売り上げる、地域の食を支える台所になっています。

直販所の隣にあるキッチンでお惣菜づくりをしているのは、おかみさん市のメンバー。集落単位でグループを組み、現在6グループで担当しています。運営母体に売り上げの20%を入れる独立採算性で、決まりごととはほとんどないそうです。四万十川の鮎、郷土野菜のりゅうきゅう・山菜のいたどり等が入った野菜たっぷりのお弁当や、栗おこわ、竹の子寿司は人気があり、お惣菜を目当てに遠くから買いに来る人もいます。

もう一つの拠点、道の駅「四万十とおわ」では週1回「おかみさん市バイキング」が人気です。こちらはおかみさん市メンバーと、道の駅で働く若い従業員と一緒に調理を行っており、郷土料理の伝承の場にもなっています。自分で育てた野菜や手作りの加工品を20%の手数料で販売できるのもやりがいになっています。



基本情報

【名称】 十和おかみさん市
 【住所】 高知県高岡郡四万十町十川 203
 【開催場所】 十和おかみさん市直売所
 【運営団体】 株式会社十和おかみさん市
 【代表】 居長原 信子
 【開設・営業開始】 1999年

【活動概要】

・おかみさん市直販所 月～土曜 8:00-16:00
 ・販売商品:産直・手作り産品
 弁当、惣菜、野菜、花苗、野菜苗、米、茶、梅干し、味噌、手作り雑貨、旅行者向け土産品など

【株式会社おかみさん市の事業】

野菜の直販・イベント販売／おもてなしツアー／おもてなしバイキング／加工品の開発・販売／学校と連携した伝承野菜の取り組み／直販所における地域や生産者達とのつながり

アセットのつながり

(1)四万十流域の食文化と、農家女性の生産・加工の技術

自家野菜を使ったふるさとの料理は、地域の人だけでなく観光客にも人気があります。家庭や地域で受け継がれてきた料理や技術は、地理的条件が厳しい地域にとって大きな価値があります。

人気のメニューの1つは「しいたけのタタキ(しいたけを揚げて、甘さのあるポン酢につけたもの)」。時々帰郷する若い人にも人気で、味付けを聞かれることも多く、しいたけのタタキ用の醤油を商品化したりもしています。

(2)地元産品の開発販売の企業・「いなか」で働く人のための社団法人との連携と後方支援

十和地域には、おかみさん市の料理や技術をビジネスにつなげたり、人材不足を補う等の人的支援をする人や組織があります。

株式会社四万十ドラマは、四万十川流域の特産品を加工販売し、日本全国に販路を拡大している地域企業です。十和のおかみさんたちが野菜をスーパーで販売するための仕組みや道の駅でバイキングを提供する基盤をつくり、ビジネスにつなげました。

一般社団法人いなかパイプは、「田舎と都会」を人材でつなぐ事業を行う団体です。おかみさん市の経理事務、情報発信等のお手伝いや、手が足りない時のパート派遣、おかみさん市バイキングの調理を若い人に伝承する等のつなぎ役を行っています。

十和地域の風土文化や郷土料理の価値を評価し、足りなくなった力を補うこうした動きが、おかみさん市の活動を支えています。

(3)株式会社として運営する意気込み

十和おかみさん市の活動は元々集落改善運動として始まりました。ベースには農村女性の自立の意識があります。

自家野菜の余剰分や、味噌、漬物などの自家産の農作物を使った加工品も、おかみさん市に出荷することで収入になります。野菜でも売り方で売れ行きが変わるので喜ばれるものをどう売るか工夫しています。

あくまで稼げる仕事として取り組むことで生きがいへとつながり、それが文化継承へのモチベーションにもつながっています。

カギとなるアセット

人	・コアメンバーは25名
場	・おかみさん市直販所 ・集落の加工所 ・道の駅四万十とおわ
モノ・資金	・地域の豊かな農産品、四万十川
情報・ネットワーク	・十和地域振興局(地域づくり支援事業ほか) ・株式会社四万十ドラマ(販路拡大、商品開発) ・一般社団法人いなかパイプ(経理事務や情報発信の手伝い、手が足りない時の人材派遣)

活動の背景

おかみさん市の組織の成り立ちは、1960年代に集落単位で組織化された女性の生活改善グループと生産加工グループが背景にあります。時代の変遷とともに、産直品の販売や特産品の開発が盛んになり、2001年に当時の十和村に「十和地産地消運営協議会」が立ち上がりました。これが「おかみさん市」の前身です。

地域の産業づくりを先導していた株式会社四万十ドラマの支援もあり、おかみさん市メンバーや旧村の関係者約200人から出資を募り株式会社を設立させました。株式会社の形態ではありませんが、地域ぐるみの住民設立の性格が強い組織形態です。

この事例から学ぶポイント

(経緯)

おかみさん市は、旧十和村(現四万十町十和地区)の農家女性を中心になって立ち上げた産直店です。主に集落単位で活動していた農家女性の加工グループにルーツを持ちます。元々集落改善運動として、厳しい環境に置かれてきた農家女性の居場所としての機能を持っていました。時代の経過とともに過疎化が進み、地域の疲弊が深刻化するようになると、彼女たちは地域のアイデンティティを次世代に残したいと考えようになります。そのためには自分たちが経済的に自立できるようになることが必要だという思いから、個々のグループが集まり1997年に「十和ふるさと産品協議会」を立ち上げます。ここで十和産品を詰め合わせ、全国に発送する活動を行うのですが、さらに彼女たちはこの経験を踏まえ、地域の有志を募り、2001年にオール十和の「十和地産地消運営協議会」を発足させます。これが現在のおかみさん市の原形です。2011年に地域住民から幅広く出資を募り、株式会社化して現在に至ります。

(運営の特徴)

おかみさん市には、メンバーの農家から直接納品された農産品はもちろん、毎日弁当、惣菜、菓子などの色とりどりの食材が所狭しと並びます。これらの内容は毎日変わります。というのは、グループによる日替わりの運営だからです。おかみさん市はひとつの会社組織であるのと同時に、個々のグループの連合組織でもあるのです。集落を単位とした加工グループは全国にあります。どこも高齢化が進み、活動を閉じるところも増えています。こうした中、おかみさん市の運営に結集することで、グループ同士がおかみさん市の運営を通じて支え合う関係が生まれています。こうした関係は、おかみさん市を取りまく生産者や販売者との関係にも広がっています。おかみさん市の売上げが増えることは農産物を納入する農家の収入増につながり、ドレッシングなどの商品開発に地元の製造・販売業者が支援することで、関係する事業者の売上増につながっているのです。

さらに、おかみさん市は遊休農地を借り上げて茶や栗などの加工品の原料を栽培するのと同時に景観保全にもつなげ、それが新たな商品化にもつながっています。互いの取引関係が互いの活動を支えるという循環が生まれているのです。そして、おかみさん市という場を通じて、「食」を通じた地域の関係が可視化されています。このことが、地域の魅力として域外からの若者の関わりを促す効果にもつながっています。

(居場所の重要性)

おかみさん市は、活動当初から域外との取引関係を重視していました。例えば、高知市内スーパーでの餅つきや郷土料理の実演販売といった「おでかけ台所」、郷土料理の「おもてなしツアー」、道の駅でのバイキングなどです。これは、地域のアイデンティティを次世代につなぐには、地域の良さを域外の人たちに理解してもらう必要があると考えたからです。同時に、人口が少なく年金生活者が多い地域では、消費も担い手も限界があるという現実的な考えも持っていました。地域づくりに必要な資源を域外から調達し、それを域内の取引関係を通じて稼いだお金を地域内で循環させているのです。また、地域に密着した活動をしながらもこのような広い視野を持っていることが、地域の住民にとって居心地のよい空間になっているだけでなく、「よそ者」を柔軟に受け入れる寛容性の高さにもつながっているといえるでしょう。

こうしたおかみさん市の懐の深さは、おかみさん市が個々の加工グループの集合体であることと無関係ではありません。一般に、集落基盤の加工グループは、昔からの住民による閉じた空間になりがちですが、こうした空間があるからこそ、強い結束力を生み出します。おかみさん市は、こうした当事者の居場所としての機能をベースにしながら、開かれた運営になっていることで「みんなの居場所」にもなっているのです。このような二重の意味での居場所は、弱体化が避けられない地縁コミュニティの代替機能を果たしながら、「開かれたコモンズ」としての機能も果たしていると考えられます。

食を通じた多世代の居場所づくりがどのように持続可能な形で成り立つかを考えるとき、おかみさん市は多くのヒントを与えてくれるように思います。

1 株式会社おかみさん市 [高知県四万十町十和地区]

周辺地区の概要

◎地域概要

十和地区は四万十町の西部に位置し、地区の中心部を流れる四万十川とその支流及び国道沿いの平地に住宅地や農地が立地する。地域面積のほとんどが森林で占められている。

◎人口データ [四万十町十和地区]

面積:164.71km²
世帯数:1,193世帯
総人口:2,367人
高齢者人口(65歳以上):1,242人
高齢化率:52.47%(令和5年1月)

発想を広げる アセット活用アイデア 8 福祉関連に見えないアセットを、どう発見・活用する?

おかみさん市は株式会社として事業を行っていますが、元々農家の女性たちの居場所としての成り立ちがあり、自分たちが栽培した農産物や手作りの加工品で、過疎化の地域を盛り立てるまちづくりの組織でもあります。また、高齢化するメンバーの社会参加の場、高齢者世帯の食を支える地域の台所としての機能も見落とせません。

地域のアセットを考える際、特に人口減少の地域では、福祉事業だけに目を向けるのではなく使えそうな資源をひろくみていく視点も大切です。

一見福祉には縁がないように見えるアセットをどう発見・活用すればいいのでしょうか。

この課題解決のアイデアを話しあいました。



第1層SC

理美容院やコンビニ・スーパーを始めとした店主さんたち、まちゆく人をよく見ている交通指導員さん、玄関のドアを開けるお仕事には宅配便の配達や乳酸菌飲料等を訪問販売している方もいます。これらの人々は、地域の人をよく知っています。なにか変化に気づいたとき、包括支援センターや社協に連絡をしてもらって関係をつくることは大切です。企業と市町村とが包括連携協定を結ぶ例もあります。



大学研究者

アクティブシニアが日常的にアクセスしているものに着目してみるのはいかがでしょうか。支援を必要とする在宅高齢者の生活課題が表れやすい場面において、アクティブシニアはどのようなものにアクセスして活用しているのかをヒントに、地域のアセットの可能性を探ると、思わぬアセットが発見できるかも知れません。



NPO事務局長

別の視点からとらえなおすことも大切です。「閉じこもりがちな退職後の男性シニアが数多くいる」という状態を、支援が必要な人や予備軍が数多くいると受け止めるだけでなく、活動の担い手の予備軍がいる、多くの知識や経験が眠っているとらえるのでは、関わり方が異なってくると思います。



元行政職員

医師会や歯科医師会等の医療関係者は大切なアセットです。私が行政職員の時に活動発表等を行う際は、必ず声をかけて情報交換を行っていました。



元行政職員

会場を貸してくれそうな先を探すことから考えてみます。例えばスペースがありそうな先として、自動車販売会社、ゴルフ練習場、神社・仏閣等があります。「福祉にご協力を」ではなく、「会場として少しの時間だけ貸してください」とお願いしてみるのはいかがでしょうか。最近は大手企業が地域貢献活動に取り組んでいるので、そういった先にもトライしてみるのも良いと思います。

「日替わりカフェオーナー」の 仕組みがつくる新たな地域のつながり わっくCafé [大阪府富田林市金剛地区]

こんな活動

誰でもウエルカムの常設拠点を日替わりカフェオーナーで運営しながら、多世代の人が得意を活かせる新たな地域のつながりづくりに挑戦しています。

運営の様子や特徴

店舗名には、「つながる気持ちが《湧く》」「みんなの思いが《沸く》」「《わくわく》する気持ち」が込められています。

商店街の中心にあり、前面ガラス張りで見える人々を呼ぶ雰囲気があるこの常設拠点を、日替わりカフェオーナーで運営しています。オーナーは「主役になって特技を活かす」「誰が来ても受け入れる(仲間内の活動にしない)」等の考えに共感した人たちです。店主になる日はネットから予約し半日1枠を3000円で利用できます。パン屋さん・スリランカカレー・薬膳ランチ・沖縄そば等の様々な店が、日替わりで開かれています。定期的に出店する人、年に数回の人等、利用の仕方も様々です。

カフェのメニューは、定番の飲み物は法人が用意しますが、それ以上は各オーナーが自由に決めることができ、客層や売上高もオーナーによって違いがあります。

カフェの壁面はボックスショップ。自分のショップとしてハンドメイド作品などを展示・販売することができます。ボックススペースの利用料金は、月1000円。売上金はオーナーの収入になります。

各オーナーが「自分のお店」の意識を持って自主的に関わることで、「いつも開いている居場所」の継続をめざしています。



基本情報

【名称】 わっくCafé
 【住所】 大阪府富田林市寺池台1-9
 【開催場所】 金剛銀座商店街内「わっくCafé」
 【運営団体】 一般社団法人わっく金剛
 【代表】 中井二郎
 【開設・営業開始】 2021年

【活動概要】

・日替わりカフェオーナー、ボックスショップオーナーによるコミュニティカフェの運営
 営業日 火～土 10:00-14:00 オーナー出店によりその他時間オープンもあり
 カフェオーナー・ボックスショップオーナー 登録料3,000円、
 利用料一コマ(6H)3,000円
 共通ドリンク300円の売り上げのうち50円を運営法人に支払う。

活動を支えるアセット

アセットのつながり

(1)日替わりカフェオーナーの仕組みで集まったメンバーたち

いつでも誰でも気ままに立ち寄れる喫茶店のようなコミュニティカフェをめざしましたが、どうやって毎日長い時間オープンさせるのが課題でした。そのためには新しい手法が必要だと考えた結果のアイデアが「日替わりカフェオーナー」の仕組みです。開業したい若者のトライアルや、退職後の地域デビュー等、これまでにない層が集まりました。

日替わりで店主が替わる店を運営するには、管理の手間を少なくすることも大切です。カフェ利用料の支払いやボックスショップの売上げはQRコード決済を使い現金を介さない工夫もしています。

(2)通る人の目を引く店舗デザイン。工事もみんなで

わっくCaféはニュータウンの中心部金剛銀座の一等地にあります。かつては多くの店舗が入り賑わった商店街も時代の変化とともに賑わいが薄れ、しばらく空き店舗となっていた物件です。改修費は市からの補助金を利用しました。コロナ関連の補助金も大きな助けになりました。

壁面一面のボックスショップ、通りから中の様子がわかるガラス張りの明るい店内、入り口に並ぶ地場野菜、サインのデザイン等には、理事の建築家が関わりました。工事もみんなで力をあわせて行い、より愛着のあるカフェができました。

(3)コロナ関連の支援金

わっくCafé立ち上げに向け有志メンバーが一般社団法人を設立したのは2020年2月。まさにコロナ禍真っ最中で、飲食関連のサービスは大きな変化を強いられた時期です。

感染への心配から人が集まる活動は一旦休止という雰囲気の中、「日替わりカフェオーナー」という目新しい仕組みは「何か楽しいことが始まりそう」なわくわく感を地域にもたらしました。

理事メンバーは立ち上げ資金に10万円ずつ出たコロナ給付金を充て、店舗の改修にはコロナ関連の創業支援金を活用するなど、コロナ禍真っ最中だからこそ使えた資源もありました。

カギとなるアセット

人	<ul style="list-style-type: none"> 一般社団法人わっく金剛のメンバー 日替わりカフェオーナー(飲食店開業したい人のトライアルや、退職後の地域デビュー、絵画や手芸の教室、メイク体験などさまざまなテーマで参加している人たち) ボックスショップオーナー(手作り手芸品、アクセサリ、ポストカードなどを展示販売したい人たち)
場	<ul style="list-style-type: none"> わっくCafé(金剛銀座商店街の元空き店舗)
モノ・資金	<ul style="list-style-type: none"> コロナ関連の支援金 オーナー登録料収入、運営費収入 UR都市機構による家賃補助(減額)
情報・ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> 富田林市金剛地区再生室(金剛地区まちづくり会議事務局)、金剛銀座商店街、UR都市機構 金剛にざわい創出実行委員会、金剛マルシェ実行委員会

活動の背景

金剛ニュータウンは高度成長期に各地に開発された大規模ニュータウンのひとつで、丘陵地にURが5000戸の賃貸団地を含む住宅地を造成し、現在約1.5万人が暮らしています。まち開きから半世紀が経過し、人口減少や高齢化、施設の老朽化に伴い地域の賑わいが失われ、地域コミュニティも希薄になってきました。

富田林市は「金剛地区再生指針」の計画に基づき、今後のまちづくりを住民や関係者が話しあう「金剛地区まちづくり会議」を設置し、会議での議論を通じて常設の拠点づくりが決まりました。

拠点立ち上げに向けて有志のプロジェクトチームが生まれ、その主要メンバーがカフェ運営組織として一般社団法人を設立、わっくCaféがオープンしました。設立時はちょうどコロナ禍で、理事は支給されたコロナ給付金を出資金にあてました。

「この場所のおかげで、自分が役割を持って日々を過ごすことができている」と初老の”おじさん”から、実感のこもったお話を聞かせてもらうことができました。

秋晴れの日、大阪・金剛のニュータウンで、たくさんの方たちとそのような”自分”の「わっくカフェ」のお話がありました。

「担い手がない」という話をよく聞きます。ここには、その課題への一つの回答があるように思いました。

行政が呼びかけた「金剛地区まちづくり会議」が元となって、現在の活動につながっています。ポイントがいくつかあります。一つ目は、会議参加者を呼びかける時点から、いわゆる「あて職」ではなく、「関心のある方なら誰でも」と呼びかけた点。二つ目は、集まった会議参加者の中から関心のあるテーマごとのプロジェクトチームをつくり、「居場所づくりチーム」を立ち上げたこと。三つめは、プロジェクトメンバーで先行事例を見学に行ったこと。そのことによって、自分たちのしたいこと、できることを見極めていきました。それが現在の具体的な工夫のある運営方法の土台となっています。そして四つ目として、そのプロジェクトメンバーの有志で一般社団法人を立ち上げ、活動実施に取り組んだことです。

立ち上げまでの約3年間のこのプロセスは、他地域でも応用可能なノウハウであると考えられます。「何かを始めたい」住民が、実際に形にしていけるプロセスとして有効です。また、行政と住民との関係性の発展のプロセスとして見ても理にかなっていると考えられます。行政に関わる大きなメリットは、一般市民に対しての信頼性です。一方で、何かを始める際には、行政的な手続きや発想が、足かせになってしまうこともあります。最初に人が集まる際は行政が前に出て、焦点が定まってくる段階に応じて、住民の主体性が前に出て、行政が後方支援へと移行していきました。活動拠点の整備に関してコロナ対策の助成事業を活用できるような仕組みをつくることや、活動の広報を担うといった支え方によって変わっていったのです。活動者の段階に応じて、その支援者が関わり方を変化していくというプロセスは、生活支援コーディネーターとしての支援のあり方と共通しているといえます。

居場所を具体的に始めるにあたって、大切にしたいキーワードをたくさん教えてもらいました。「おしゃれ」であること。外から「楽しそう」な様子が伝わること。したいことをなるべくできるように「細かなルールはつくらない」こと。

唯一のルールは、「いつでも、誰でも来ることができる」ことのように。理念としてはよく見聞きしますが、それを具現化する方法も細やかです。仲間内の貸し切り利用はしない。共通メニューのドリンクは必ず提供できるようにする。日替わりオーナーが見つからない場合は、運営者の理事メンバーで曜日担当をする。

300円の共通メニューのドリンクの売上げの取り分を、当初は運営者と日替わりオーナーとで150円ずつの折半だったのが、50円を運営者に渡し、残りの250円を日替わりオーナーの取り分にすると、いうように活動を進めていく中で細かな修正を行っている点も見逃せないと感じました。運営者のキャッシュポイントはそこではないと判断し、日替わりオーナーが場を開くことへの動機づけをより強めたといえるでしょう。

そして、「運営者の負担を最小限にする」こと。居場所を継続するための資金を、運営の中で捻出できる仕組みにすること。「日替わり“オーナー”」の言葉が表すように、運営者側の視点に立つてもらいように働きかけること。

いずれにしても、カフェに関わることで金銭的に大きな営利を得る人はいません。そういった観点とは別に、様々な「お金」を流通させることが、多様な人々の交流を呼びこんでいると感じました。また、「お金」を媒介させることが主体性や責任感にも関連しているように思います。非営利ならではの「お金」を媒介とした人のつながりづくりについて、私たちはもっとできることが数多くあるように思いました。

11 一般社団法人わっく金剛 わっくCafé [大阪府富田林市金剛地区]

周辺地区の概要

◎地域概要

金剛地区は1970年代に開発された大規模ニュータウン。大阪都心へのアクセスも良く高度成長期に大量の人口流入を受け入れた。近年は人口減少、少子・高齢化、施設の老朽化等オールドタウン化に伴う課題を抱える。

◎人口データ [富田林市金剛地区] (令和4年3月末)

面積:2.16km²
世帯数:8,371世帯
人口:15,860人
高齢者人口(65歳以上):5,925人
高齢化率:37.4%(令和4年)

発想を広げる アセット活用アイデア 9 今までにない新しい層を巻き込むには?

わっくカフェは、日替わりオーナーの仕組みにより運営されている特徴があります。オーナー登録をする際には、一人ひとりに「鍵の開け閉めも行う、まさしくオーナーの自覚」を持ってもらいたいと伝えるそうです。ちょっと負担に感じる人もいるかも知れませんが、だからこそ開業したい若者や、退職後に地域デビューしたシニア等、これまでにない新しい層の人々が集まってきています。

地域活動や介護予防活動は、取り組む人の顔ぶれが決まった人になりがちです。この事例のように、今までにない新しい層を巻き込むには、新しい発想や視点が必要なきもありません。

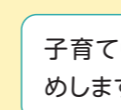
こうした今までにない新しい層を巻き込む工夫には、どんなことがあるのでしょうか?

この課題解決のアイデアを話しあいました。



大学研究者

地域活動の成果発表会や、行政や民間の助成金を受給した団体の活動報告会等、様々な活動を知る機会があります。そういう場所にまずは気軽に参加してみるのもいいですね。



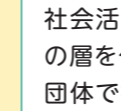
第1層SC

子育て中のママパパと出会いたいときは、高齢者が竹馬等の昔遊びイベントを企画することをお勧めします。そうすると、ママやパパも子どもと一緒に参加されますので、新たな出会いになりますね。



元行政職員

大学や専門学校に通う学生たちと知りあいたいなら、学生たちが取り組んでいる活動を発表する場やボランティア見本市のようなものを開催してもいいかなと思います。発表数が少なければ、社協に登録している地域団体にも声をかけ賑やかにしてもいいです。発表内容をチラシにして地域に配布することで、広く啓発できます。



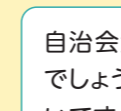
大学研究者

社会活動やセカンドキャリアに興味のある層と出会いたいときのアイデアがあるんです。まずは、その層をターゲットとしている行政等が開催する講座を把握します。そして、講座の一コマをSCや活動団体で担当させてもらえないかを相談してみます。社会課題を提示したり、日頃の活動の見学や実習先の仲介ができることを提案するのです。講座を担当できれば、そこに参加してきた人たちと出会えますし、実習先で活動を継続する人も出てくるかも知れません。



県社協職員

コロナ禍で対面での活動が難しい状況が続く中、一方ではフードパントリーやお弁当配付等の新しい活動も生まれています。そうした中、食料や品物を受け取っていた人たちに、配付側として関わってもらおう等、役割が変化する可能性を感じています。息の長い活動をしていくためには、助けられたり、助けたりと双方向の関係性を作っていくことも大切です。



第1層SC

自治会活動でこれまで活躍してきた人を対象に、違うアセットを引き出すワークショップはできないでしょうか。例えば「得意なこと」「地域の中で少しお手伝いできそうなこと」等をテーマにするのもいいですね。時間・曜日・内容によっては今までと違う関わり方で、新たな人を巻き込めますね。

活動を立ち上げたいが「この地域にはアセットがない」と思ったとき、どうする？

「SCの研修や事例集で紹介される事例は、人や場所、資金等のアセットに恵まれていると感じる」「うちの地域には資源がなにもない」という声をよく聞きます。

自分の地域でも活動を立ち上げたいが、「活動をやってみたい人」も「みんなで集う場」もない、いったいどこから始めればいいのかと悩んでいる人も多いと思います。

「この地域にはアセットがない」と悩んだ時、どこから取り組むとよいでしょうか？

この課題解決のアイデアを話しあいました。



行政職員

アセット発見は、一人で悩んでいてもなかなか難しいです。自分一人のつながりや情報には限界があるからです。活動を立ち上げる上で必要だと思うアセットを整理した上で、地域活動している人や住民、様々な人とディスカッションしてみることをおすすめします。ディスカッションすることで考えが深まり、相手から使える情報を引き出せることがよくあります。

「ない」と思っていたのに、出会った経験があります。あまり否定的に考えず、関係者に聞いたり調べてみる等、動いてみるのが大切です。



子ども食堂主催者



大学研究者

いつもと少し違う活動、例えば「市民活動」や「まちづくり活動」の人たちはどんなアセットを活用しているのか聞いてみるのもいいかなと思います。新しい発見がきっとあるでしょう。

いつもと少し違う活動という視点は大切ですね。私も高齢者分野にないとき、「児童分野」や「障害分野」等で類似のアセットがないかを探することがあります。見つけたアセットがあったら、試しにその資源を活用してみることが大切です。



県社協職員



第1層SC

いつもと少し違う視点と言えば、近隣の市町村のアセットを調べることも良いと思います。そして似たようなアセットが自分の地域にないかを調べてみましょう。少し視点を変えるだけでも、自分の地域に活かせるアセットが見つかるかもしれません。送迎なども、近隣の市町村の活動が利用できることもあります。

今ある活動に意味づけをすることも大切ですね。例えば、新幹線の高架下にあるちょっとしたスペースにふらっと仲間が集っていました。「ここもみんなの居場所ですよ」とSCが意味づけすることで、「これくらいなら自分たちでもできる」と市民の意識が変わったことがあります。



第1層SC



NPO事務局長

空き家・空き店舗・空き地が多い状態は、新たな活動拠点となる可能性が数多く存在しているとも考えられます。そして活動拠点を改装するにあたって、自分たちだけで行うことは大変ですが、例えば建築関係の学生にとっては実習の場になったり、手づくりで改装するプロセス自体が人を結びつける機会にもなります。

【資料編】

事例から、わがまちの食支援活動を考えよう！

事例から、わがまちの食支援活動を考えよう!

ご紹介した11の事例はいかがでしたでしょうか。

「この活動いいな〜」「やってみたい!」と思ったものはありましたか?

ここでの事例を参考に、あなたのまちでもぜひ食に関連する活動の立ち上げや活性化に取り組んでいきましょう。

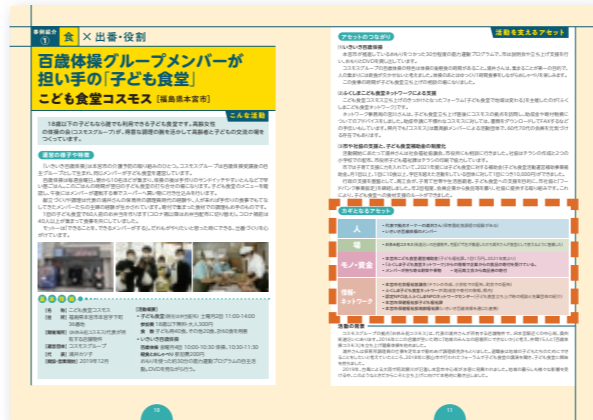
職場の仲間や住民の方々と一緒に楽しくおしゃべりをしながら、以下の項目を考えてみてください。

1 このガイドブックの中で、気になる事例はありましたか?

- 事例① 百歳体操グループメンバーが担い手の「子ども食堂」 **子ども食堂コスモス**
- 事例② 江戸時代の登録文化財“足軽の家”で「シニア男性が運営する子ども食堂」 **足軽子ども食堂**
- 事例③ 「調理ボランティアの派遣」活動を創出して、地域サロン応援 **サロンで調理ボランティア**
- 事例④ 団地の空き店舗で「食品販売と日替わり定食提供」 **UR公田町団地「いこい」**
- 事例⑤ 食を介してゆるやかなつながりを築く場所 **ここめし/ここめし女子会**
- 事例⑥ 地域のシニアボランティアが「朝食サービス」で子どもの育ちを応援 **下小モーニング**
- 事例⑦ 赤ちゃんから高齢者まで、「世代間交流があるダイニングサロン」 **介護予防サロン福蝶とキッズカフェ**
- 事例⑧ 買い物困難地域の生活を支える「移動販売車」と地域交流 **上郷東連合町会 移動販売車**
- 事例⑨ コロナがきっかけで生まれた「動く会食会・青空カフェ」 **キッチンカーdeあおぞらカフェ**
- 事例⑩ 「農家の女性たちがつくるふるさとの料理」で地域活性 **十和おかみさん市**
- 事例⑪ 「日替わりカフェオーナー」の仕組みがつくる新たな地域のつながり **わっくCafé**

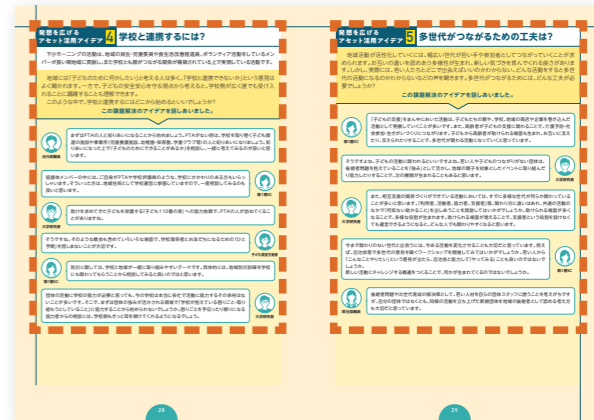
2 1で書いた事例は、どんなところが気になりましたか?

3 気になった事例のアセットを書き出してください。
(ガイドブックの「カギとなるアセット」参照)



人	()
場	()
モノ・資金	()
情報・ネットワーク	()

4 3のアセットを、わがまちに当てはめるとしたらどんなものがあるでしょうか?
(ガイドブック「発想を広げるアセット活用アイデア」の関連ページも参照)



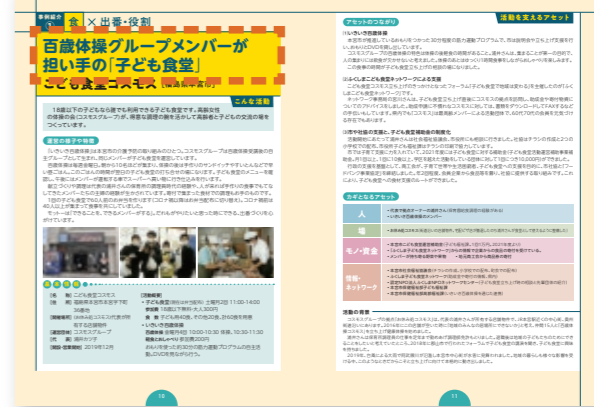
人	()
場	()
モノ・資金	()
情報・ネットワーク	()

5 わがまちのアセットを活用して、どんな活動ができそうですか?
活動のキャッチコピーを考えてください。
(ガイドブックの「事例紹介のタイトル」参照)

主体▶どんな人たちが
()

対象・目的▶だれのために、なんのために
()

内容▶どんなやり方で何をするのか
()



生活支援コーディネーターによる 住民主体の「食」関連生活支援サービスの開発支援方策と 持続可能な事業実施・展開に関する調査研究事業

委員構成

研究委員会

委員長

内藤 佳津雄 日本大学文理学部 教授

委員

秋山 由美子 特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所 理事

荒井 崇宏 稲城市福祉部高齢福祉課高齢福祉係 係長

石田 惇子 一般社団法人 全国食支援活動協力会 代表理事

石橋 智昭 公益財団法人 ダイヤ高齢社会研究財団 主席研究員

日下 直和 社会福祉法人 香川県社会福祉協議会 事務局長

近藤 博子 一般社団法人 ともしびatだんだん 代表理事

清水 洋行 千葉大学大学院人文科学研究院 教授

隅田 耕史 特定非営利活動法人 フェリスモンテ 事務局長

高橋 良太 社会福祉法人 全国社会福祉協議会地域福祉部 部長

田中 将太 琉球大学人文社会学部 専任講師

中島 智人 産業能率大学経営学部 教授

原田 晃樹 立教大学コミュニティ福祉学部 教授

平野 覚治 一般社団法人 全国食支援活動協力会 専務理事

村田 明日香 社会福祉法人 石川県社会福祉協議会 地域福祉課

室田 信一 東京都立大学人間社会学科社会福祉学教室 准教授

目崎 智恵子 高崎市第1層生活支援コーディネーター 主管課高崎市福祉部長寿社会課

[ワーキング部会]

部会長

平野 覚治 一般社団法人 全国食支援活動協力会 専務理事

委員

清水 洋行 千葉大学大学院人文科学研究院 教授

中島 智人 産業能率大学経営学部 教授

原田 晃樹 立教大学コミュニティ福祉学部 教授

目崎 智恵子 高崎市第1層生活支援コーディネーター 主管課高崎市福祉部長寿社会課

令和4年度 厚生労働省 老人保健健康増進等事業

生活支援コーディネーターによる
住民主体の「食」関連生活支援サービスの開発支援方策と
持続可能な事業実施・展開に関する調査研究事業

「食でつながる」活動ガイドブック

事例から考えるアセット活用アイデア

一般社団法人 全国食支援活動協力会 編

ガイドブック編集チーム

伊藤浩巳・小泉愛佳・岩寄いづみ(一般社団法人 全国食支援活動協力会)

宮地成子(場所づくり研究所 有限会社プレイス)

デザイン カタヤナギユウイチ

一般社団法人 全国食支援活動協力会

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21

電話 03-5426-2547 <https://www.mow.jp/>

発行日 2023年3月30日

「食でつながる」 活動ガイドブック

事例から考える
アセット活用アイデア